

シンポジウム

平成二十七年皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術シンポジウム

（平成二十七年十二月十九日（土）午後一時～五時、於皇學館大学 佐川記念神道博物館講義室）

桓武天皇とその時代

〔発題者（発題順）〕 佐野 真人氏（本センター助教）

遠藤 慶太氏（本センター准教授）

大平 和典氏（本センター准教授）

〔司会・コメント〕 荊 木 美 行氏（本センター副センター長・教授）

平成二十七年皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術シンポジウム

(平成二十七年十二月十九日(土) 午後一時～五時、於皇學館大学 佐川記念神道博物館講義室)

桓武天皇とその時代

〔発題者(発題順)〕 佐野真人氏 (本センター助教)

遠藤慶太氏 (本センター准教授)

大平和典氏 (本センター准教授)

〔司会・コメント〕 荊木美行氏 (本センター副センター長・教授)

〔研究開発推進センター長挨拶〕

【佐野真人】皆様、今日は年末も押し迫ってご多忙のところ、ご参集くださりまして誠にありがとうございます。定刻となりましたので、ただいまから平成二十七年皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術シンポジウム「桓武天皇とその時代」を開会させていただきます。開会に先立ちまして、皇學館大学研究開発推進センター長の岡野友彦よりご挨拶申し上げます。

【岡野友彦】みなさんこんにちは。皇學館大学研究開発推進センター長をさせていただきます。平成二十七年神道研究所公開学術シンポジウムを「桓武天皇とその時代」と題して開催いたしましたところ、大勢お集まりいただきまして誠にありがとうございます。ここにおられる方はもうご存知かと思いますが、私も皇學館大学研究開発推進センターは、平成二十五年四

月に、それまでございました神道研究所、史料編纂所、そして神道博物館の三つの組織を一つにする形で出来上がりました。その中のひとつでございます神道研究所では、永らく「皇室祭祀の研究」と「神宮祭祀の研究」の二つを総合研究に掲げて研究を行ってまいりましたが、特に、平成二十四年度からは『延暦儀式帳』という史料の研究を開始しております。『延暦儀式帳』は、延暦二十三年(八〇四)に伊勢の神宮から朝廷に提出された文書でございます。桓武天皇の御世に作成されているものです。そこで『延暦儀式帳』の研究をするためには、桓武天皇の御世(奈良時代の終わりから平安時代の初め)を、きちんと研究するべきではないか、ということがセンター内部で議論されるようになりました。おりしも、同じセンター内部に史料編纂所というのがございますが、こちらでも永らく『続日本紀史料』という史料集の刊行をやってまいりました。この全二十巻がやはり一昨年の平成

二十四年に完結を見ましたが、この『続日本紀』という史料は、これはまた後でパネリストの遠藤慶太先生からお話があるかとは思いますが、桓武天皇によって編纂が開始されて、その治世であります桓武天皇の時代の延暦十年までが採録されている、そういう史料集です。その史料集の最後の所を編纂された荊木美行先生・遠藤慶太先生がおられるわけで、まさに、『延暦儀式帳』の研究と『続日本紀』の研究は両方とも桓武天皇の時代であり、その二つがセンター内部に重なった。さらに神道博物館の学芸員としてこの四月から働いておられます大平和典先生が、学生時代からのご専門が『日本後紀』ということで、この小さい大学の、しかも研究開発推進センターの中で、八世紀末から九世紀初頭という桓武天皇の時代を専門として議論できる専任の教員が三人・四人揃っている、これは大変なことだと思いますので、是非今日、午後五時までという長丁場になりますけれども、三人のパネリスト、そして司会をお願いしております荊木先生からの御議論を通じて、桓武天皇の時代とはどんな時代だったのか、そういうことを皆さんと共有できればうれしいと思います。

少し長くなりましたけれども、これで開会にあたりましてのご挨拶とさせていただきます。

〔パネリスト紹介〕

【佐野】本日の進行は、研究開発推進センター副センター長・教授の荊木美行先生にお願いしております。ここで司会を交代いたしまして、以後の司会進行は荊木先生、宜しくお願い申し上げます。

【荊木美行】ただいまご紹介にあずかりました皇學館大学研究開発推進センター副センター長の荊木美行でございます。着座のまま失礼いたします。本日は、私が司会進行役をつとめさせていただきます。

最初に、今日パネリストとして三人の発表をうかがうことになっておりますが、

それぞれのタイトルとならびに講師のご経歴について、かんたんにご紹介申し上げます。発表順になりますが、最初は、研究開発推進センター助教の佐野真人先生でございます。タイトルは「桓武天皇の御生涯と祭祀」です。佐野先生は静岡県のご出身で、平成十七年に本学の文学部国史学科を卒業し、平成二十二年に本学大学院博士後期課程を満期退学。その後助手、現在は助教として研究開発推進センター神道研究所で勤務しております。現在の仕事は、先ほど岡野センター長からご紹介がございましたが、『皇太神宮儀式帳』の校訂・注釈です。佐野先生は、古代の天皇祭祀について研究している新進の学徒です。つぎに、遠藤慶太先生ですが、皇學館大学研究開発推進センター史料編纂所准教授です。本日ご報告いただくタイトルは、「桓武天皇と『続日本紀』」です。遠藤先生は兵庫県のご出身で、平成九年に本学の文学部国史学科をご卒業。その後、大阪市立大学大学院に進学され、こちらで栄原永遠男先生の指導の下研究を続け、博士号を取得し、母校に戻ってこられました。皇學館大学研究開発推進センター史料編纂所では、『続日本紀史料』の編纂に従事し、完結後も六国史編年史料集の編纂を継続しております。つづいて、大平和典先生です。皇學館大学研究開発推進センターの准教授をつとめております。大平先生は栃木県のご出身で、平成十二年に本文学部国史学科をご卒業の後、十四年に博士前期課程を修了し、その後助手として館史編纂室という皇學館大学の二三〇周年史を編纂する部署に勤務し、先ごろ完結しました『皇學館大学百三十周年史』の編纂に力を尽くしてこられました。その後、学史の編纂の完了と学内の組織改編を受けて、昨年より皇學館大学研究開発推進センターの一員にお迎えして一緒にお仕事を致しております。大平先生のテーマは『日本後紀』の桓武天皇紀です。さきほど岡野先生の方からもご紹介いただきましたが、本学のような小規模校で七、八世紀の研究に携わっている研究者が複数在籍するのは珍しいことですが、精鋭が一同に会して「桓武天皇とその時代」というタイトルでシンポジウムを開くことができるのは関係

者の一人として悦しいことです。

今日のテーマとなっております桓武天皇について、少しわたくしのほうからご説明申し上げます。桓武天皇は、天平九年（七三七）のお生まれでございます。実はこの年は、都で天然痘が大流行した年でして、あの有名な藤原不比等の息子の藤原四兄弟もこの天然痘に罹ってバタバタと亡くなって、多数の犠牲者が出た年でもございます。そうしたなかであって、乳幼児であった桓武天皇は病氣にかかることもありませでした。そして、無事成長し、天応元年（七八二）四十五歳のときに光仁天皇の崩御を受けて即位されます。爾来大同元年（八〇六）に七十七歳で崩御するまで四半世紀二十五年にわたって玉座に君臨され——敢えて「君臨」と申し上げますが——歴代天皇のなかでも存在感のある明主として評価されております。寿命は父親の光仁天皇の方が一年長いのですが、ですから、二十四半世紀にわたる在位は光仁天皇の十一年を大きく上回っています。

桓武天皇は、いろいろな点でひじょうに注目すべき天皇です。じつは、称徳天皇の崩御によって、百年以上の長きにわたって続いてまいりました天武天皇の子孫による皇位継承が杜絶します。そして、光仁天皇の時代からは天武天皇の皇統に変わります。父の光仁天皇は自分が新王朝を創立したという意識はあまりなかったようなのですが、桓武天皇はこのことを強く意識していたと思われれます。また、桓武天皇は、その系譜を辿っていくと、渡来系氏族に繋がります。これはよく知られたことですが、こうした、みずからの血筋も、桓武天皇の新王朝意識に強い影響を及ぼしていたことと考えられます。桓武天皇は、恐らく父光仁天皇の時代から天命を受けた新たな王朝の創立という風に強く意識していたわけで、これは中国で云うところの「革命思想」です。こうした新たな王朝を創立した人物であるという自認が、長岡京・平安京への遷都をはじめとして、数々の劃期的な政策に結びついていると云っても過言ではありません。おそらく先生がたの報告にも出てくると思いますが、桓武天皇は延暦四年（七八五）に河内国の交野と

いうところで天神を祀る祭祀を始めています。いわゆる郊祀と呼ばれる、この祭祀こそ桓武天皇の新王朝意識を強く表しているお祭りです。この祭祀については、佐野先生の発表を聴いていただけたら幸いです。

桓武天皇の四半世紀に及ぶ治世の中でよくとり上げられるのは、軍事と造作というキーワードです。すなわち、さきほどもお話ししました、長岡京・平安京への遷都、そして蝦夷との戦争、この二つでございます。今回のシンポジウムでは、こうした桓武天皇の代表的な事蹟についての発表は用意しておりません。これは現在、皇學館大学研究開発推進センターでおこなっている事業が、おもに桓武天皇朝の祭祀、あるいは修史事業を中心としているので、そのあたりの事情を勘案してのことです。今回のシンポジウムが成功すれば、さらに軍事と造作といった桓武天皇朝の中心となるような問題についてもシンポジウムを企画できればと考えております。「続編」に期待してください。

ただ、本日のシンポジウムで取り上げる文化事業も桓武天皇朝の性格を考える上でたいせつな事蹟でございます。遠藤先生が取り上げる『続日本紀』四十巻の編纂と完結、さらには今日のお話には出てこないかも知れませんが、『延暦交替式』、あるいは刪定律令などといった、さまざまな法令の編纂もこの時代の大きな事業のひとつでございます。また、桓武天皇は、神祇制度の確立を目指しておりました。『皇太神宮儀式帳』『止由気宮儀式帳』の編纂は、延暦二十三年のことですが、この二つの儀式帳の編纂も、桓武天皇の勅命によっておこなわれたものです。また、これも残念ながら今回の発表にはございませんが、のちに嵯峨天皇の時代に『新撰姓氏録』に結実する氏族志の編纂も、桓武天皇が発案し、尽力された事業のひとつです。今回のシンポジウムでは、こうした、桓武天皇朝の修史作業や祭祀を取り上げながら、この時代の実相に迫りたいと考えております。前置きが長くなりましたが、それでは、まず、佐野真人先生に「桓武天皇の御生涯と祭祀」という題目でお話をおうかがいします。佐野先生、よろしくお願いします。

〔発題一〕

桓武天皇の御生涯と祭祀

佐野 真人

【佐野】改めまして神道研究所の佐野真人でございます。まず、資料の確認をお願いいたします。資料は少し多いのですが、二十頁までをA3片面刷り十枚となっています。また、資料の修正は適宜口頭で行いますので、ご了承ください。時間も限られていますので、さっそく報告に入らせていただきます。

一、はじめに

第五十代桓武天皇は、光仁天皇の皇子で、諱は山部、母は高野新笠。天応元年（七八二）に父・光仁天皇の讓位をうけて即位、長岡京・平安京への遷都を敢行し、産業・文化の中核をなす現在の京都の礎を固めました。また、光仁天皇朝以降に度重なる蝦夷征討を行い、造都と征夷のために民衆は疲弊し、晩年に至って造宮と征夷を中止しています（徳政相論）。さらに桓武天皇の即位は辛酉革命、長岡遷都は甲子革命の識緯説に基づき、桓武天皇ご自身が光仁天皇は天智天皇系王朝の高祖であり、自らは天智天皇系王朝の太宗であるから、庶政を改革し、武威を内外に示し功業を樹てねばならぬと考えられたという議論が多くみられます（古くは瀧川政次郎・瀧川政次郎「革命思想と長岡遷都」〔法制史論叢二「京制並に都城制の研究」所収、角川書店、昭和四十二年〕、林隆朗「長岡・平安京と郊祀円丘」〔古代文化〕一八二、昭和四十九年など）。本報告では、新王朝説の特色と解される昊天祭祀を中心に、怨霊思想などを含めて、桓武天皇の御生涯を振り返り、当時の政治的背景を今一度考察したいと考えています。

御略歴につきましては、配布資料の六枚目下段以降に掲載している【桓武天皇略年譜】（後掲の配布資料参照）を適宜ご参照ください。

二、降誕から諸王時代

それでは、桓武天皇の降誕から諸王時代を簡単に振り返りたいと思います。降誕は天平九年丁丑（七三七）で、諱は山部、白壁王（後の光仁天皇）の長子、母は高野新笠です。降誕の年は、史料1の崩御記事の宝算から逆算すると天平九年となります（『日本後紀』延暦二十五年（大同元年、八〇六）三月十七日条）。是歳は、疫病が流行し、藤原四子（武智麻呂・房前・宇合・麻呂）など相次いで薨去している歳です。この点から、生誕地は天然痘が流行した平城京より遠い地と推定すべきという説が出され、山背国内の長岡村・宇太村あたりと村尾次郎氏は推測されています（村尾次郎『桓武天皇』〔吉吉〕。川弘文館、昭和三十八年）。諸王時代の位階・官職は、二十八歳（天平宝字八年）で従五位下（『続日本紀』天平、三十歳（天平神護二年）で従五位上（『続日本紀』天平神護二年十一月五条）に補されています。この頃、大学頭に就任していたと考えられます。それは『続日本紀』宝龜元年（七七〇）八月二十八日条に「授三大学頭諱從四位下」とあること、また大学頭は従五位上相当官（『令義解』）であることからの推察です。三十四歳（宝龜元年）で從四位下・侍從となり（『続日本紀』宝龜元年八月二十八日条）、父・白壁王の即位に伴い、四品に叙され、親王となりました（『続日本紀』宝龜元年十一月六日条）。さらに三十五歳（宝龜二年）で中務卿となりました（『続日本紀』宝龜二年三月十三日条）。ここで重要な点として考えられるのは、諸王時代に大学頭を歴任したことは、漢学・大陸の祭祀など学問的知識を習得していた可能性があるということです。これは、即位後に昊天祭祀などが行われますが、それに関わってくる重要な点であると思います。

簡略でしたが、桓武天皇の降誕と諸王時代について振り返ると、山部王が即位する可能性はまったくありえない状況でした。桓武天皇が即位する前段階として、次に父である白壁王の立太子から即位までを確認します。

三、光仁天皇（白壁王）の即位

奈良時代の皇位は、基本的に天武天皇の血を引く系統の皇族によって継承されてきました。天武天皇の後継には、天皇と皇后鸕野讃良皇女（後の持統天皇）の間に生まれた草壁皇子が定められていましたが、持統天皇三年（六八九）に二十八歳で薨去。持統天皇の後を継いで即位した草壁皇子と阿部皇女（後の元明天皇）の御子である文武天皇も二十五歳で崩御されてしまいます。その後は文武天皇の皇子である首親王（後の聖武天皇）の成長を待つことになり、その間は元正天皇・元明天皇が皇位を継承することになりました。ちなみに当時は、ほぼ三十歳前後での即位が慣例の時代であったことを付け加えておきます。また、持統天皇・元明天皇は天智天皇の皇女ですが、天武天皇の皇后、草壁皇子の妃として即位したもので、一般的には天武天皇の系統の天皇と位置付けられています。これは天武天皇系の皇族によって皇位継承が続くほど、天智天皇系の子孫は今上（天武天皇系の天皇）とは血縁関係が薄くなり、朝廷内で占める役割も小さくなっていくということが実情です。そして、天武天皇系皇族の多数存在する状況下にあつては、白壁王が即位する可能性は限りなくゼロに近かったといえ、奈良時代はそのような状況下だったのです。それが白壁王の立太子に向けて時代が動いていくことになりました。

諸王時代の白壁王については、『続日本紀』光仁天皇即位前紀に以下のような記述があります。

『続日本紀』光仁天皇即位前紀

天皇諱白壁王。近江大津宮御宇天命開別天皇之孫。田原天皇第六之皇子也。母曰三紀朝臣橡姫。贈太政大臣正一位諸人之女也。寶龜二年十二月十五日。追尊曰三皇太后。天皇寛仁敦厚。意豁然也。自三勝實一以來。皇極無貳。人疑三彼此。一。罪廢者多。天皇深顧三横禍時。一。或縦レ酒晦レ迹。以レ故免レ害者數

矣。（後略）

即位前紀によれば、天平勝宝以来後継者が定まらず、人々が疑い合い、失脚・横死するものが多く存在した。白壁王はそれに巻き込まれることを避けるために酒に溺れたふりをしたと記されています。「即位への影響力がなければ、隠密行動をとる必要はない。白壁王は皇位に近い存在であった」と井上満郎氏は述べていますが（井上満郎『桓武天皇（ミナモト）』、果たしてそうだったのでしょうか。ここで白壁王の官歴と奈良時代の政権の変遷を振り返りたいと思います）。

白壁王は天平九年（七三七）に無位から従四位下（『続日本紀』天平九年（七四六）に従四位上（『続日本紀』天平十八年四月二十二日条）、天平宝字元年（七五七）に正四位下（『続日本紀』天平宝字元年五月二十日条）となりました。ちょうどこの頃、橘諸兄が歿し、道祖王が廃太子となり、そして橘奈良麻呂の変が起こります。つづいて天平宝字二年（七五八）に正四位上（『続日本紀』天平宝字二年八月一日条）となつていきます。この頃は、藤原仲麻呂政権が成立する時期です。天平宝字三年（七五九）には従三位（『続日本紀』天平宝字三年六月十六日条）、天平宝字六年（七六二）に中納言に就任し（『続日本紀』天平宝字六年十二月一日条）、天平宝字八年（七六四）には正三位（『続日本紀』天平宝字八年九月十二日条）とつていきます。天平宝字八年九月には藤原仲麻呂の乱が勃発し、塩焼王が「今帝」に偽立されます。その後、淳仁天皇廃位、称徳天皇重祚と続く時期です。天平神護元年（七六四）に勲二等（『続日本紀』天平神護元年正月七日条）、この頃の出来事としては道鏡政権の誕生、和氣王（天武天皇曾孫）の謀反があります。さらに天平神護二年（七六五）には大納言に就任しました（『続日本紀』天平神護二年正月八日条）。その後の神護景雲三年（七六九）には、不破内親王・具犬養姉女らの巫蠱事件が起こっています。

非常に簡単でしたが白壁王の官歴と政権の変遷を振り返ると、皇位に近い存在であったかは不明です。しかし、白壁王は官僚としての経歴を重ね、正三位大納言の立場にあり、奈良時代の度重なる政権抗争から身を守るための工作であったことは推測できると思います。

そのような白壁王に転機が訪れたのは、称徳天皇が皇太子を定めずに崩御されたことからです。これを宇佐八幡宮の神託も絡めながら見ていきたいと思えます。『公卿補任』から神護景雲四年(宝亀元年、七七〇)の公卿を抜粋してあげておきました。

『公卿補任』神護景雲四年条(抜粋)	
左大臣	正一位 藤永手 五十七
右大臣	正二位・勲二等 吉備真吉備 七十七
大納言	正三位 白壁王 六十二
	従二位 弓削朝臣清人
	正三位 大中臣清磨 六十九
中納言	正三位 大中臣清磨 六十九
	正三位 藤宿奈磨 五十五
参議	正三位 石川豊成
	正三位 文室大市 六十七
	正三位 藤魚名 四十九
	従三位 同〔藤原〕清河
	従三位 藤宿奈磨 五十五
	従三位 石上宅嗣
	従三位 藤縄磨
	正四位下 同〔藤原〕田磨 四十八
	従四位上 多治比真人土作
	従四位上 藤継縄
致仕大納言	従二位 文室浄三 七十八
非参議	従三位 藤蔵下磨 三十七
	従三位 高麗福信

『公卿補任』を確認すると、神護景雲四年当時に白壁王はナンバー3の地位にあり、参議以上の皇族も白壁王のみということがわかります。次に称徳天皇崩御から白壁王立太子までの経緯を確認します。

『続日本紀』宝亀元年(七七〇)八月四日条

癸巳。天皇崩于西宮寢殿。春秋五十三。左大臣従一位藤原朝臣永手。右大臣従二位吉備朝臣眞備。参議兵部卿従三位藤原朝臣宿奈麻呂。参議民部卿従三位藤原朝臣縄麻呂。参議式部卿従三位石上朝臣宅嗣。近衛大將従三位藤原朝臣藏下麻呂等。定策禁中。立諱爲皇太子。左大臣従一位藤原朝臣永手受遺宣。曰。今詔〔久〕。事卒〔尔〕有依〔天〕諸臣等議〔天〕。白壁王〔波〕諸王〔乃〕中〔尔〕年齒〔毛〕長〔奈利〕。又先帝〔乃〕功〔毛〕在故〔尔〕太子〔止〕定〔天〕奏〔波〕奏〔流〕麻〔仁〕麻〔尔〕定給〔布止〕勅〔久止〕宣。

『続日本紀』には、藤原永手・吉備眞備ら公卿が「禁中」で「策」を定め、称徳天皇の「遺宣」によって白壁王を皇太子としたと記しています。称徳天皇の「遺宣」の中で、白壁王立太子の理由として明記されているものは、以下の二つです。①「諸王の中に年齒も長なり」、これは諸王の中で最も年長であることです。②「先の帝の功も在る故」、これは天智天皇の功績があることの二点が白壁王が立太子された理由です。①については、当時の白壁王は六十二歳であり、高齢の皇太子を立てたことは、新皇太子争いが激しかったことの表れと井上満郎氏は述べています(前掲『桓武天皇』)。②については、『礼記』祭法に「法を民に施した君主」は永年にわたる祭祀の対象になることが記されており、天智天皇は初めて律令を定めた天皇として奉幣などの対象とされています。詳細は拙稿をご参照ください(拙稿「山陵祭祀より見た天智・光仁・桓武三天皇への追慕意識」(『神道史研究』六十一、平成二十四年 参照)。

以上が公式の歴史書である『続日本紀』に記載された白壁王立太子の顛末です。しかし、『続日本紀』には記載がない異伝が残されています。それが次に示した

「百川伝」の伝承です。それが六国史を抄出したとされる『日本紀略』に記載されています。後出の藤原種継暗殺事件などのところも、現在伝わるところの『続日本紀』には記載がなく、『日本紀略』のみに残されています。これは『続日本紀』の複雑な編纂過程など非常に難しい問題で、私の次にご発表される遠藤慶太先生がご専門ですので、詳細は遠藤先生のご発表に譲りたいと思います。「百川」とは、藤原式家の祖・宇合の八男である藤原百川のこと、この人物が、桓武天皇を理解するのは、重要な人物となってきます。

『日本紀略』光仁天皇即位前紀宝龜元年八月癸巳条所引藤原百川伝

宝龜元年八月癸巳。天皇崩于西宮。(中略) 百川伝。云々。宝龜元年三月十五日。天皇聖体不予。不視朝百餘日。天皇愛道鏡法師將失天下。道鏡欲快帝心。於由義宮以雜物進之。不を得拔。於是。宝命白頽。医藥無驗。或尼一人出来云。梓木作金筋。塗油挾出。則全宝命。百川竊遂却。皇帝遂八月四日崩。天皇平生未立皇太子。至此。右大臣真備等論曰。御史大夫從二位文室淨三真人。此長親王之子也。立為皇太子。百川与左大臣内大臣論云。淨三真人有子十三人。如後世何。真備等都不聽之。冊淨三真人為皇太子。淨三確辭。仍更冊其弟參議從三位文室大市真人為皇太子。亦所辭之。百川与永手良繼定策。偽作宣命語。宣命使立庭令宣制。右大臣真備卷舌無如何。百川即命諸仗。冊白壁王為皇太子。十一月一日壬子。即位於大極殿。右大臣吉備長生之弊。還遭此恥。上致仕表隱居。

この「百川伝」の取り扱いには注意が必要です。それは藤原百川の個人の伝記という私的な史料であり、百川の事を誇張して掲載していることを考慮しなければなりません。しかし、正史を補う史料と見ることができます。「百川伝」では、最初に称徳天皇崩御に関する猟奇的な記事がありますが、まず吉備真備は文室淨三を推挙したとされています。藤原百川と藤原永手らが議論して文室淨三には子

供が十三人おり、後世再び皇位継承争いが起きることへの懸念を露わにします。吉備真備はこれを聞かず文室淨三の立太子を進めようとしませんが淨三自身がこれを辞退しました。次に真備は弟の文室大市を推挙しましたが、これも本人が辞退をしてしまいます。この両人の辞退には、藤原百川が裏工作を行った可能性があると井上満郎氏は述べておられます(前掲『桓武天皇』)。そして、藤原百川は永手・良繼とはかり、白壁王を立太子させる様子が記されています。

ちなみに『続日本紀』に記載された称徳天皇の「遺宣」には、白壁王が皇太子に立てられた理由として、誰よりも年長であることが挙げられていました。しかし、先ほどの『公卿補任』を見ると、文室淨三は七十八歳、文屋大市は六十七歳と、六十二歳の白壁王より年上であることがわかります。これでは、年齢が誰よりも上であることという「遺宣」と矛盾するように考えられますが、この矛盾を解釈する手助けとなる史料が、宇佐八幡宮の神託との関係です。

宇佐八幡宮神託事件は、周知の通り、神護景雲三年(七六九)五月に、道鏡の弟で大宰帥の弓削浄人と大宰主神の習宜阿曾麻呂が「道鏡を皇位につかせたならば天下は泰平である」という内容の宇佐八幡宮の神託を奏上し、道鏡は自ら皇位に就くことを望むということが発端の事件です。事件の詳細と顛末は割愛しますが、宇佐八幡宮に和氣清麻呂が遣わされ以下の神託がありました。

『続日本紀』神護景雲三年(七六九)九月二十五日条

大神託宣曰。我國家開闢以來。君臣定矣。以臣爲君。未之有也。天之日嗣必立皇緒。无道之人。宜早掃除。

「百川伝」にあった文室淨三と弟の大市の二人は、天武天皇皇子たる長親王の子ですが、すでに臣籍に下っていることなどから厳密な意味で、必ずしも「天つ日嗣は、必ず皇緒を立てよ」との神託には当てはまらず、藤原永手の推す白壁王が即位することこそが皇統を守ることと永手自身が認識していたと俣野好治氏は指摘しています(俣野好治「藤原永手―その政治姿勢と政治的立場」(栄原永遠男編、古代の人物三「平城京の落日」、清文堂出版、平成十七年)。

このように白壁王は、元々即位する可能性は皆無に等しいものでした。それが度重なる政争の結果、皇位継承の候補者が次々と排斥されていったことにより、称徳天皇崩御の段階では、正三位大納言としてナンバー3の地位にあり、皇太子候補者の一人に挙げられるに至っていました。また、藤原百川伝では、吉備真備などの反対勢力が存在したことが窺え、朝廷内の意思は統一されていなかったと考えられます。

以上のような経緯から即位した光仁天皇自身が、天智天皇系の新王朝意識を持っていたのかは不明です。しかし、称徳天皇の「遺宣」に「先帝（天智天皇）の功績」と明言されることは、天武天皇系の天皇が続く奈良時代にあつて、天智天皇は「法を民に施した」天皇として評価されていたことの表れであろうと考えられます。

四、山部親王の立太子

これまでは、桓武天皇が即位するための前段階として、光仁天皇の即位までの経緯を確認しました。次に山部親王の立太子について考えたいと思います。

即位の可能性がなかった父・白壁王が即位したからといって、長子である山部親王には、皇位はおろか立太子される可能性も極めて低かったというのが現実です。それは、光仁天皇の皇太子に立てられたのは、山部親王の弟で二十五歳下の他戸親王であつたということです（『続日本紀』宝龜二年（七七二）正月二十三日条）。この他部親王は、光仁天皇と皇后である井上内親王との間に生まれた皇子で、山部親王は長子でありましたが、他戸親王が皇太子となることは、当時としては順当なことであつたであろうといえます。父である光仁天皇が即位しても、自らが皇太子にもなれずにいた山部親王にとって転機となつたのが、宝龜三年（七七二）に起こつた井上内親王の廃后と他戸親王の廃太子という事件です（『続日本紀』宝龜三年（七七二）三月二日条、『続日本紀』宝龜三年（七七二）五月二十七日条参照）。繰り返しになりますが、光仁天皇の皇太子は他戸親王でした。

しかし、宝龜三年（七七二）皇后井上内親王が天皇に対する呪詛の咎により廃后されたことにより、連坐によつて他戸親王も廃太子となつてしまいます。これには藤原百川が暗躍か（中川收『奈良朝政治史の研』（究）（高杉書店、平成三年））、あるいは藤原良継・百川主導体制が成立し永手が薨去していたことが要因（本好信『奈良時代の政争と皇位継承』（吉川弘文館、平成二十四年））という説があります。そして、他戸親王の廃太子によつて、山部親王を皇太子に擁立する勢力が表に現れてきます。

山部親王の立太子に重要な役割を果たしたのが、先ほ少しだけ触れました藤原百川です。宝龜四年（七七三）正月二日に、山部親王は皇太子に立てられました（『続日本紀』宝龜四年（七七三）正月二日条）。『続日本紀』の記事は「立中務卿四品諱爲皇太子」とあるのみで非常に簡略なのですが、しかし、山部親王の立太子はそんなに簡単なことではありませんでした。それが以下の『宇多天皇御記』と『水鏡』から窺えます。

『宇多天皇御記』寛平二年（八九〇）二月十三日条（『扶桑略記』）

十三日己巳。大臣参入言曰。可レ加二小童仲平元服一。即簾前立二倚子一就之。大臣祇候。爰使散位定國先結髮。次朕著冠。（中略）太政大臣會語曰。白壁天皇時將立皇太子。其議未定。大臣真吉備。并諸公卿議立他帝之子。宣命之書奏了。爰藤原百川破其書。立柏原天皇為皇太子。大臣嘆曰。我年耄親恥如レ此。柏原天皇緣百川之功。親臨加子緒嗣元服。（後略）

『水鏡』下 光仁天皇段

濱成ト申シ、臣申テ云ク。山部ノ親王ハ御母賤ク御座ス。如何ガ位ニハ付給ハント申然バ。御門誠ニサル事也。酒人ノ内親王ヲ立テ思ト宣ニ。濱成重ネテ申云ク。第二ノ御子葦田ノ親王ハ御母賤カラズ御座ス。此親王ヲコソ立給バク候ヘト申時。百川目ヲ見イカラカシ。太刀ヲヒキクツロゲテ。濱成ヲノリハウ言シテ申様。位ニ付給人更ニ以テ母ノ賤キ高キ云事ヲ撰ブベカラズ。

山部親王ハ御心目出。世人モ皆隨奉心アリ。濱成ノ申サン事更ニ道理ニアラズ。(中略) 御門ハ百川ガ心ノ強クユルバザルヲ御ランジテ更バ疾ク山部ノ親王皇太子ニ立給フベキニコソト。シブシブ仰出給シヲ。御詞未畢ラザルニ。百川庭ニ下テ手ヲ打喜聲ヲビタシク高クシテ人々皆聞キ驚ク様ナリキ。其時百川聽テ司々召テ。山部ノ親王ノ御本ニ立奉テ。太子ニ立奉ニキ。御門ハアワタシク思シテ。アキレ給ヘル御様ニテゾ御座シ。濱成ハ色ヲ失。朽タル木ナンドノ如ニ見侍リキ。

『宇多天皇御記』の逸文には、寛平二年(八九〇)に藤原仲平の元服に際し、加冠を宇多天皇親らが行ったことで、藤原基経は桓武天皇の故事を引用し語っています。その内容は、①光仁天皇の皇太子について、前右大臣吉備真備(宝龜二年に致仕)を始め、諸公卿は他帝の子を擁立しようと宣命の原案を奏上しました。②藤原百川によって山部親王が擁立され、③大臣吉備真備は、老いばれが恥をかけたと嘆き、また百川の功績により、百川の子である緒嗣の元服に桓武天皇自らが臨んでいた。というものです。

『水鏡』では、①藤原濱成によって、生母の出自が皇后井上内親王に比べて低いとして反対意見が出され、光仁天皇も一度は納得し、酒人内親王を立てようとした様子が述べられています。そして、②稗田親王ならば、生母の出自は賤しくないとの意見も藤原濱成から出されています。稗田親王とは山部親王の十五歳年下の弟で、母は尾張女王(湯原親王女)です。湯原親王は志貴皇子の子にあたります。③藤原百川は皇太子となる人物について母親の出自の貴賤で撰ぶべきではないと主張し、最終的には藤原百川によって山部親王が推されます。④光仁天皇は山部親王立太子に渋々同意したと記載されています。『水鏡』の記事の真偽は定かではありません。しかし、即位直後の天応元年(七八二)六月十六日に藤原濱成は大宰員外帥に左降され、また延暦元年(七八二)の氷上川継謀反事件(後述)で除外されていることに注目され、反桓武天皇勢力の人物であったと推測できます。

あくまで参考ですが、『水鏡』には後日談的な話が記載されていて、それは宝龜九年(七七八)二月、或る人が、宝龜六年(七七五)に亡くなっているはずの他戸親王が生存しているという噂を天皇に奏上しました。天皇は他戸親王を再び皇太子に立てたく思い、勅使を縫殿寮に遣わして確認させようしました。百川は勅使を恐喝し生存しないことを復命させます。これによって他部親王は朝廷から永久に追放され、山部親王が正式な皇太子と定められたということです。さらに百川によって虚偽を復命した勅使について『水鏡』には、「其御使ノ両眼共抜落侍リニシ。是偏ニ天照太神ノ正キ御孫ヲ空誓事ヲ立テ、追隠シ奉タル神罰ト覚ユ」と記されています。そして、次に触れる山部親王の病気の記事へと続いています。この内容は信憑性に欠きますが、皇太子となった山部親王や、それを擁立した藤原百川に対して、不満を持つ勢力が朝廷の内部にも存在していたと読み解くことが可能であろうと思います。また、山部親王は、藤原百川によって支えられていた様子も垣間見えます。

以上のように、当初の皇太子であった他戸王に代わって立太子し、また立太子についても朝廷内には、山部親王(桓武天皇)を押す動きは少数であったことや、外戚の血統が軽視されていたことを考えれば、山部親王の立太子は、藤原百川の功績が大であり、山部親王の即位は、政権を二分しかねない不安材料であった言わざるを得ないと考えられます。そして初めての渡来系氏族を外戚に持つ天皇として即位した桓武天皇にとって、自身の立太子の時点から生母の出自の低さが問題視されていたことは、コンプレックスとなったことではないでしょうか。次に山部親王の病気(宝龜八年・九年)について、以下に関係記事をあげました(後出の配布資料参照)。

時間の都合もあり、史料を読み上げることはいたしません。宝龜八年(七七七)から同九年(七七八)にかけて、病名は不明ですが山部親王は病に倒れてしまします。そのために廃朝になったり(『続日本紀』宝龜九年正月一日条)、東大寺・西大寺・西隆寺の三ヶ

寺に誦経(『続日本紀』宝龜九年(七七八)三月二十日条)、天下大赦(『続日本紀』宝龜九年(七七八)三月二十四日条)、伊勢大神宮と天下諸神に奉幣(『続日本紀』宝龜九年(七七八)三月二十七日条)などが行われました。特に注目したいできことは、山部親王の病中であつた宝龜八年十二月に井上内親王を改葬していること(『続日本紀』宝龜八年(七七七)十二月二十八日条)。宝龜九年(七七八)三月の疫神を祭ることとあわせて、怨霊思想への萌芽かと井上満朝氏は述べていますが(『前掲』恒)、さらに加えて私が注目したいのは、宝龜九年(七七八)十月に山部親王自らが伊勢大神宮を参拝していることです(『続日本紀』宝龜九年(七七八)十月二十五日条)。一般的に解釈すれば、三

月に病氣平癒のための奉幣が行われており、病氣が平癒したのでその奉幣のために自らが参拝したとなります。細かいことを言えば、三月の奉幣は勅使を以て行われたと考えるのが通常です。この場合、奉幣を行った主体は光仁天皇ということになります。つまり、三月の病氣平癒奉幣の報賽ならば(『続日本紀』宝龜九年(七七八)三月二十七日条)、勅使を差遣するのが自然なことと言えます。しかし、皇太子山部親王自らが参拝するということは、病氣平癒の御礼もあるとは思いますが、「所_三以賽_三宿禰_二也」には、もつと大きな意味があるのではないでしょうか。皇太子自らが伊勢に下向し、参拝するということはそれだけ重大な問題であると思います。

あくまでまったくの推論ですが、先ほど参考にあげた『水鏡』に、藤原百川の脅迫によつて虚偽を復命した勅使に対して「是偏_二天照太神ノ正キ御孫ヲ空誓事ヲ立テ、追隠シ奉タル神討ト覚ユ」とあり、その記事に続けて山部親王の病氣の記事となることから、皇位継承の正統性に関する問題もかかわっているのではないかと思います。しかし、史料的根拠はありませんから、推測の域を出ません。様々な紆余曲折もあり、ようやく皇太子となり、一年以上の長期にわたる病氣も平癒した山部親王に、次なる不安な事態が起こります。それは藤原百川が宝龜十年(七七九)に薨去してしまつたことです。

『続日本紀』宝龜十年(七七九)七月丙子(九日)条
丙子。参議中衛大將兼式部卿從三位藤原朝臣百川薨。(中略)今上之居_二東宮

一也。特属_レ心焉。于_レ時上不豫。已經_二累月_一。百川憂形_二於色_一。醫藥祈禱。備盡_二心力_一。上由_レ是重_レ之。及_レ薨甚悼惜焉。時年卅八。延暦二年追_二思前勞_一。詔贈_二右大臣_一。

『続日本紀』には、今上(すなわち桓武天皇)が皇太子であつたときからの側近であり、桓武天皇が病に倒れた時には、百川は憂いの色をあらわにして、医薬や祈禱に心力を尽くし、その甲斐あつて山部親王は回復した。薨去したことに桓武天皇(山部親王)の悲しみは甚だしいもので、即位後の延暦二年(七八三)に右大臣を追贈したという内容です。資料にはあげていませんが、『水鏡』には井上内親王の崇りのため薨去したとあります。いずれにせよ山部親王は、自身を皇太子に立て、即位への道筋を敷いた桓武天皇政權にとっての重要人物である藤原百川という後ろ盾を即位前に失うという事態は、桓武天皇にとっては重大な問題です。ちなみに『帝王編年記』には「藤原朝臣百川頓死」とあり、これには反百川勢力が関与した可能性も考えられますが、とにかく朝廷内部で反山部親王派を抑えていた後ろ盾を失つたことは、山部親王支持基盤の弱体化・崩壊を招く恐れもあり、来たるべき次期政權運営にとって重大な不安材料となつたことは確実であると思います。

五、桓武天皇の即位

即位以前の話がずいぶん長くなつてしまいましたが、ここからは即位以降について述べたいと思います。まず問題となるのが、天応元年(辛酉年)の即位に革命意識はあつたかということです。

桓武天皇の即位は辛酉革命、長岡遷都は甲子革命の識緯説に基づくと瀧川政次郎氏や林陸朗氏が述べています(瀧川政次郎『革命思想と長岡遷都』(法制史論叢二『京制並に都城制の研究』所収、角川書店、昭和四十二年)、林陸朗『長岡・平安京と郊祀内丘』(『古代文化』一八二、昭和四十九年三月)。しかし、私の考えは結論から申し上げれば、辛酉年の即位に革命意識はなかつたと考えております。誤解を恐れずに言えば、桓武

天皇の即位が辛酉年にあたるのは、あくまで偶然で、革命意識は後になって付け足されたものと考えています。

『続日本紀』が記すところの桓武天皇の即位は、光仁天皇の譲位を受けて即位したということに終始しており、そこから革命意識や新王朝意識を導き出すことは難しいと思います。光仁天皇はあくまで高齢で御病氣による退位をされたのです。また、正月朔日に「天応元年」と改元されますが、これは光仁天皇の御代の元号であり、桓武天皇の即位にもなって改元されたものではありません。資料にはあげませんでしたが、天応元年（七八二）正月朔日の改元は、伊勢斎宮に美しい雲が現れ、これが天皇の徳を慕って現れる「大瑞」にかない、改元の詔によれば、光仁天皇の徳政に「天が応えている」ということから、国民一同で祥瑞を悦ばんと「天応」と改元されたものでした。あくまで仮定の話ですが、辛酉年の即位が織り込み済みのことで、あらかじめ準備しておくならば、桓武天皇の即位にもなって祥瑞が現れ改元が行われたならば、革命意識があったということになろうかと思いますが、私は光仁天皇からの譲位によって即位されたことを重要視する立場を取りたいと思います。

それでは、光仁天皇にとって退位の発端となる出来事から見ていきたいと思えます。それは皇女である能登内親王の薨去です（『続日本紀』天応元年（七八二）二月十七日条）。皇女能登内親王の薨去は、高齢の光仁天皇にとって痛烈な衝撃を与えたと推測できます。『続日本紀』に示された詔では、「いつしか病止めて」参内してくるのを「今日かあらむ明日かあせむ」待ち続けたけれども、「年高く成りたる朕を置きて」先に薨去したことに驚き嘆き、また悔しく思っている。このようなことになるのだしたら「心置きても談らひ賜相ひ見て」おいたものを、「朕は汝の志を暫しの間も忘れ」ずに「悲しび賜ひしのび賜ひて大御泣哭かす」と述べています。この能登内親王の薨去が光仁天皇退位の引き金となったと井上満郎氏は述べています（『前掲』桓武天皇）。またこの頃、光仁天皇は御病氣を患われていました。『続日本紀』天

応元年（七八二）三月甲申（二十五日）条に「朕枕席不_レ安。稍移_二晦朔_一。雖_レ加_二醫療_一。未_レ有_二効驗_一」とあることから、光仁天皇は、かなり長期にわたって御病氣であったと考えられます。そして、天応元年（七八二）四月三日に皇太子山部親王に譲位されます（『続日本紀』天応元年四月三日条）。

『続日本紀』に記載された譲位の宣命によれば、退位の理由は最初の傍線部に、①「嘉政頻闕（_レ弓）天下不_レ得_二治成_一」と自身の政治の至らざるを述べ、②「元來風病（_レ尔）苦（_レ都）身體不_レ安」とかねてからの病氣、③「復年（_レ毛）弥高成（_レ尔弓）餘命不_レ幾」と高齢であることの三点があげられています。①は慣例に近いもので、実際の退位は、②・③の長年の病氣と高齢を理由としてのものと考えられます。

また、譲位宣命の後段には「此の如き時に当つつ、人々好からぬ謀を懷きて天下をも乱し己が氏門をも滅ぼす人等まねく在り」云々とあり、人々が不穏な行動に出て、天下に騒動を起こすことを戒める内容を付け加えています。これは、譲位と新帝即位が行われる国家的重要な時に、朝廷内に謀反につながりかねない不穏な動きが水面下にあったことを物語っていると言えるでしょう。桓武天皇にとって、自身の即位は辛酉年の天命による即位というよりも、立太子の時の反対勢力の動きや、後ろ盾であった藤原百川を失い、また、即位を目の前に朝廷内では反対勢力による不穏な動きも懸念される状況にあつて、皇位に就くことへの不安の方が大きかったのではないのでしょうか。

そのような状況の中で、御代替わり直後の十二月には、父である太上天皇が崩御されます。退位直後の崩御であつたことを考え合わせると、光仁天皇は病氣を理由に譲位を行なわれたと考えるべきです。ちなみに、太上天皇の崩御直前には、藤原濱成によって皇太子候補に挙げられた稗田親王も薨去しています（『続日本紀』天応元年（七八二）十二月十七日条）。光仁太上天皇の崩御記事（『続日本紀』天応元年（七八二）十二月二十三日条）に「太上天皇崩。春秋七十有三。天皇哀號。咽不_レ能_二自止_一。百寮中外。慟哭累_レ日」とあり、桓武

天皇は、父光仁天皇の崩御に際して、悲しみのあまり、咽て自ら止めることができないくらいに泣かれたと記されます。この尋常ではない天皇の悲しまれようは、今後の政權運営に大きな不安を抱いておられためかと推察されます。

次に問題となるのが、桓武天皇に天智天皇系新王朝意識はあったかということです。これも結論から申し上げますと、桓武天皇自身が明確に新王朝意識も持っていたことを示す史料はありません。これも後世になって付け加えられたものと言えます。

『江次第鈔』第三、正月、国忌をご覧ください。

今案天子七廟或有二九廟之說一。故陽成天皇以前或八廟或七廟。其数不レ定。然光孝以来定為二九廟一。其中以二天智一為二太祖一。蓋天武天皇皆舒明之子。然文武至二廢帝一天武之裔即位。天智之流如レ絶。爰光仁天皇為二田原之皇子一而因二群臣推戴一得レ登二帝祚一。於是。天智之流勃興。加之天智天皇始制二法令一。謂二之近江朝廷之令一。天下百姓因レ准之。爾來至レ今皆天智之一流。而為二太祖之廟一豈不レ可乎。又光仁已為二中興之主一故為二第二世一。桓武創二平安京一故為二三世一。（後略）

国忌の対象とすべき歴代天皇については中国の宗廟制度の追加・消除の例に倣いますが、『江次第鈔』によれば、文武天皇以来、天武天皇の皇統が続き、光仁天皇の即位によってこれまで断絶していた天智天皇の皇統が復活、それ以来この皇統が続いており、天智天皇を太祖、光仁天皇は中興の主として二世、桓武天皇は平安京を造り三世と考えています。これは両統迭立や南北朝時代を経ているため、より直系皇統を意識した一条兼良の時代の認識によるものと考えられましよう。それでは、平安時代の桓武天皇に対する認識は、どのようなものだったのでしょうか。

『政事要略』卷二十九、年中行事十二月下、荷前

柏原陵〔平安宮御宇桓武天皇。在二山城国紀伊郡一。兆域東八町。西三町。南

五町。北六町。加丑寅角二岑一谷。守戸五烟。〕

平安宮移レ都帝也。仍亦載レ之。人代第五十。自餘陵可レ見レ式。

『政事要略』を記した惟宗允亮の認識は、平安京（すなわち現在の京都）に遷都した天皇として記されています。この他に『政事要略』荷前事には山陵の始まりとされる神代三陵、初代天皇として神武天皇陵、神に祀られたとして神功皇后陵と応神天皇陵、律令を初めて制定したとして天智天皇陵が記載されています。その他の天皇陵は『延喜式』を参考にするように指示が注記され掲載されています。他に柏原山陵（桓武天皇陵）への奉幣の宣命に「平安京を万代ノ宮と定め」た天皇として奉幣の対象となったと記されています（『日本後紀』弘仁元年（八一〇）九月十日条『日本三代実録』貞観八年（八六六）九月二十五日条等参照）。このような点から天智天皇系新王朝意識は後付けされた可能性があると言えるかもしれません。

少し話はずれますが、参考として平安京のイメージも後世に付け足されたということ述べたいと思います。平安京は「四神相応の地」であり、風水によって都城が守られているという俗説があります。しかし、それが最も早く現れるのが『平家物語』です。

『平家物語』（卷五、都遷）では、大納言藤原小黒丸等が、「左青龍、右白虎、前朱雀、

後玄武、四神相應の地也」と奏上したとありますが、『日本後紀』が残っていないので『日本紀略』を見ますと、延暦十二年（七九三）正月十五日【略年譜では十六頁の後ろから三行目】に大納言藤原小黒麻呂・左大弁紀古佐美等を山背国葛野郡宇太村に遣わし遷都の地を視察させていますが、宇太村が四神相応の地と奏上したことは記されていません。また、『平家物語』でも「左青龍、右白虎」とあるのみで、一般的に言われる「東に流水・南に澤畔」とはないうことに注視する必要があります。東に流水・南に澤畔・西に大道・北に山が四神相応地とするのは、『簠簋内伝』という書物からになります。

『簠簋内伝』卷四、四神相応地

東有^三流水^一曰^三青龍^一。南有^三澤畔^一曰^三朱雀^一。西有^三大道^一曰^三白虎^一。北有^三高山^一曰^三玄武^一。

右此四物具足則謂^三四神相応地^一。尤大吉也。(後略)

この『簠簋内伝』は、陰陽道による天文暦数書で、陰陽道の立場から、天文暦数に関して吉凶・禁忌などのことを網羅的に説いている書物で、作者を安倍晴明に仮託はしていますが、村山修一氏などの研究により鎌倉時代末の成立かとされています(村山修一『日本陰陽道史総説』(塙書房、昭和五十六年))。つまり、平安京遷都当時の史料には「四神相応の地」は見られず、後世に付け足された可能性が高いと思われます。長岡京は十年足らずで廃都となりますが、平安京を四神相応説で考えた場合、四神相応のふさわしい土地があるのに長岡京に遷都したことは疑問が残りますし、延暦四年(七九五)の事件が無ければ、長岡京が恒久の都となったはずですので、四神相応説による平安京遷都は後から付け足されたイメージとなります。また、四神が東西南北に一致するのは、寛弘二年(一〇〇五)の木幡寺の『京都府木幡寺鐘銘』が初見とする井上満郎氏の見解(前掲『桓武天皇』)もそれを裏付けているでしょう。

先述のごとく、天皇自身の生母の出自の低さ、反対勢力の存在(光仁天皇も立太子に一時反対)、水面下に存在する謀反の動き(讓位宣命)、最大の擁護者であった藤原百川を失ったことで、桓武天皇の政権は弱い立場にあったと言えるでしょう。父光仁天皇も立太子に反対された伝承もあり、桓武天皇にとっては天智天皇系新王朝という壮大な思想よりも、光仁天皇からの皇位継承を正統なものと位置付け、政権を安定ならしめることが急務であったと考えられるのです。

それは、光仁天皇が即位されても、長子であった山部親王は皇位に就く予定は本来なかったという認識が、当時の朝廷内(公卿たち)に存在したということになるからです。そして、光仁天皇が讓位宣命で懸念されていたように即位直後からの謀反事件が頻発します。

まず、氷上川継謀反事件が即位翌年の延暦元年(七八二)閏正月に勃発します

桓武天皇とその時代(シンポジウム)

『続日本紀』延暦元年閏正月甲子条)。氷上川継は、天武天皇の曾孫で、塩焼王の子です。前にも少し出てきましたが、父・塩焼王は、道祖王が廃された後に孝謙天皇の皇太子に推されましたが、結局は大炊王が立太子しました(これには、塩焼王は聖武太上天皇への無礼があったことが理由とされています)。そして藤原仲麻呂の乱では、塩焼王は「今帝」に偽立されましたが、近江国で朝廷軍に討伐されています。母は不破内親王(聖武天皇皇女)です。不破内親王も称徳天皇を呪詛したとされる人物です。このような点からも氷上川継は皇位への野望が高い人物ではないかと考えられ、反桓武天皇派に擁立されやすい人物ではなかったかと考えられます。

この謀反事件で注目したいのが、氷上川継の妻は、あの藤原濱成の娘であり、後述する山上船主と三方王もこの時に事件に関与して左降させられているということです(『続日本紀』延暦元年閏正月十八日条)。藤原濱成といえ、桓武天皇擁立に反対したとされる中心人物の一人で、すでに桓武天皇即位直後の天応元年(七八二)六月十六日に大宰員外帥に左降されています。また『続日本紀』延暦元年(七八二)閏正月壬寅(十九日)条によれば、事件の関係者として処罰されたのは三十五人で、その中には大伴家持も含まれていました。三方王・大伴家持も関与したということが非常に重要で、その後の事件にも関与しており、氷上川継謀反事件は個人の単発の謀反ではなく、朝廷内には反桓武天皇勢力が数多く存在していたことを傍証していると考えられます。

そして、三方王は続いて厭魅事件を起こしています。三方王は、舍人親王の孫かと推測される人物で、天平宝字三年(七五九)に淳仁天皇の父である舍人親王に崇道盡敬皇帝の尊号が贈られた際に、一挙に四階昇進して従四位下に叙せられていることから、舍人親王の孫として二世王待遇となったと想定されています。また、三方王の邸宅で宴を催した際に大伴家持が詠んだ和歌が『万葉集』(四四八三番歌、四四九〇番歌)に残っており、家持との親交がうかがわれます(目崎徳衛『平安文化史論』(おうふう、昭和四十三年))。『続日本紀』延暦元年(七八二)三月戊申(二十六日)条

によれば、この事件に関与した中心人物は三方王・山上船主・弓削女王の三人です。

三方王・山上船主は、氷上川継謀反事件に連座してすでに左降されています。また、「自餘支党亦拋^レ法処^レ之」(『続日本紀』延暦元年(七八二)三月二十六日条)

人物も相当数存在したことを窺わせます。この点からも繰り返になりますが、やはり氷上川継謀反事件は単なる暴発ではなく、反桓武天皇勢力(それには反藤原氏勢力を含むと考えられますが)、それらの勢力が大きかったことを物語っているのではないかと考えられます。つまり、反勢力が多い状況の中で、新王朝の創出をアピールすることは難しいのではないかとことです。新王朝をアピールすれば、更なる反乱を招く可能性も高くなつてしまいます。

続いては、いよいよ延暦四年(七八五)の藤原種継暗殺事件に迫っていきたいと思います。まず、延暦四年の情勢と事件の簡単な概要を振り返ります。八月二十四日に 桓武天皇は、平城宮へ行幸されて長岡京には不在でした(『続日本紀』延暦四年八月二十四日条)。

これは伊勢斎内親王として皇女の朝原内親王が伊勢に群行するための発遣の儀に臨むための行幸でした。八月二十八日、この日には大伴家持死去しています(『続日本紀』延暦四年八月二十八日条)。

大伴家持は氷上川継謀反事件の際にも処罰されていることは、先にも述べました。大伴家持は死亡していましたが、九月の暗殺事件に関与が疑われ官位が剥奪されてしまいました。そして、九月二十三日に事件が起こり、桓武天皇の側近であった藤原種継が、何者かに射られ薨去いたしました(『続日本紀』延暦四年九月二十三日条、『日本書紀』延暦四年九月二十三日条)。藤原種継暗殺の凶報は、平城旧都におられた桓武天皇のもとにすぐさま知らされたらしく、九月二十四日に桓武天皇は、長岡京に還幸。そしてすぐに犯人が捕縛されました(『日本書紀』延暦四年九月二十四日条)。

『日本書紀』延暦四年九月丙辰(二十四日)条には、『続日本紀』には見られない記事が見られます。それ見ると、捕縛された大伴継人と佐伯高成の供述によれば、首謀者は大伴家持ということで、家持は大伴・佐伯両氏に藤原種継を排除す

ることを唱え、皇太子早良親王に啓上し、そして、実行させたという内容です。実際のところ、早良親王がどこまで関与していたかは不明ですが、大伴家持は氷上川継謀反事件で処罰されており、反桓武天皇派(反藤原氏)の人物であったということは確認されると思います。

そして九月二十八日には、皇太子早良親王等の処分が決定します(『日本書紀』延暦四年九月二十日条)。

その処分内容は、藤原種継暗殺の延長戦線に謀反の計画を認定します。宣命には「式部卿藤原朝臣を殺し、朝庭を傾け奉り、早良王を君とせむと謀りけり」・「藤原朝臣の在れば安からず。此人を掃き退けむと、皇太子に掃き除むんとて、依りて許し諂^レんぬ」とあり、桓武天皇を退位に追い込み、早良親王の即位を目指したクーデター計画であったと認定しました。そして、注目すべきなのは、事件の共謀者は非・反藤原氏勢力であったということです。詳細は申し上げませんが別表を適宜ご参照ください【後掲の配布資料参照】。また、早良親王は長岡京郊外の乙訓寺に幽閉され、十数日間飲食せず、淡路移送中に餓死してしまいました。しかし、死亡しても許されることはなく、そのまま屍を淡路へ配流とされました。

十月八日に早良親王廃太子の一件について、山科(天智天皇)・田原(光仁天皇)・後佐保山(聖武天皇)の三陵に奉告します。なお、田原陵は施基皇子、後佐保山陵を改葬前の光仁天皇陵とする説(吉川真司「後佐保山陵」、『続日本紀研究』三三一、平成十三年四月)があります。私の立場は、これまで通りの光仁天皇と聖武天皇陵と解する立場をとっております。十一月十日には、天神を交野に祀るということをおこない(『続日本紀』延暦四年十一月十日条)、十一月二十五日に安殿親王(後の平城天皇)の立太子が行われ、事件は終息をみました。

先述した桓武天皇自身の立太子当時には、多数の反対勢力が存在しながらも藤原百川によって擁立されたことは、事件の共謀者のほとんどが、非藤原氏であることが示しているように、反藤原氏勢力の不満として集結し、氷上川継謀反事件・藤原種継暗殺事件の要因になっていると考えられます。即位当初の桓武天皇の政

権運営は、政治的に非常に不安定であり、後ろ盾であった藤原百川はすでになく、即位直後の延暦四年には、側近であった藤原種継も暗殺され、さらに政権基盤が弱体化し、崩壊の危機であったと言えるでしょう。また、さらには朝廷を二分しかねない政権抗争に発展する要素も持ち合わせていたというのが、桓武天皇朝の始まりでした。つまり、そのような危機的な状況下にあつては、新王朝意識の創出よりも、政権の安定化と、自身が正統な天子であることを内外に宣明することが必要となってくるのだらうと思います。

そこで取り入れられたのが、昊天祭祀という中国的な祭祀であつたと私は考えます。昊天祭祀とは、天子が都城の郊野に設けた祭壇で天地を祀る祭儀です。『大唐開元礼』には、皇帝冬至祀圜丘、皇帝正月上辛祈穀于圜丘をはじめとして、皇帝立春祀青帝于東郊、皇帝立夏祀赤帝于南郊、皇帝季夏土王日祀黄帝于南郊、皇帝立秋祀白帝于西郊、皇帝立冬祀黑帝於北郊を主なものとして、この他にも多くの郊祀に関する儀礼が挙げられています。殊に冬至または正月上辛に南郊円丘で昊天上帝を祀る郊祀は『周礼』以来歴代皇帝の重要な祭儀とされています（詳細は拙稿「日本における昊天祭祀の受容」（『続日本紀研究』三七九、平成二十一年）、同「奈良時代に見られる郊祀の知識——天平三年の対策と聖武天皇即位に関連して——」（『続日本紀研究』三九二、平成二十三年）を参照）。

『続日本紀』延暦四年（七八五）年十一月壬寅（十日）条

壬寅。祀天神於交野柏原。賽_二宿禰_一也。

『続日本紀』延暦六年（七八七）十一月甲寅（五日）条

十一月甲寅。祀天神於交野。其祭文曰。維延暦六年歲次_二丁卯_一十一月庚戌朔甲寅。嗣天子臣謹遣_二從二位行大納言兼民部卿造東大寺司長官藤原朝臣繼繩_一。敢昭告_二于昊天上帝_一。臣恭膺_二眷命_一。嗣_二守鴻基_一。幸賴_二穹蒼降_レ祚覆_二燾騰_一。敬。四海晏然万姓康樂。方今大明南至。長晷初昇。敬采_二燿祀之義_一。祇修_二報德之典_一。謹以_二玉帛犧齊粢盛庶品_一。備_二茲禋燎_一。祇薦_二潔誠_一。高紹天皇配神作主尚饗。又曰。維延暦六年歲次_二丁卯_一十一月庚戌朔甲寅。孝子皇

帝臣諱謹遣_二從二位行大納言兼民部卿造東大寺司長官藤原朝臣繼繩_一。敢昭告_二于高紹天皇_一。臣以庸_二虛忝_一承_二天序_一。上玄錫_レ祉率土宅_レ心。方今履長伊始。肅事_二郊禋_一。用致_二燿祀于昊天上帝_一。高紹天皇慶流_二長發_一。德冠_二思文_一。對越昭升。永言配_レ命。謹以_二制幣犧齊粢盛庶品_一。式陳_二明薦_一。侑神作主尚饗。

先学諸説は、天智天皇系新王朝の誕生を意識しているとされています。はたして本当にそうなのでしょうか。延暦四年（七八五）の郊祀の詳細はわかりませんが、延暦六年（七八七）は、光仁天皇を「配神作主」・「侑神作主」として実施されたことが確認されます。簡単に言えば、光仁天皇を神に祀り、それを通して昊天上帝を祀っているとお考えください。祭祀の詳細は『大唐開元礼』や『大唐郊祀録』に詳しいのですが、村尾次郎氏は隋の文帝が父である桓王（武元皇帝）を祀つた例を参考にしたと述べていますが（村尾次郎「延暦の禮文」（『神道史』、『研究』四十二・四、平成六年十月）、私は二代皇帝煬帝の例も含めて考えたいと思います。

隋の初代文帝の皇太子は、元々煬帝の兄である楊勇でありましたが、楊勇は派手好みで愛妾を求め、正妃を疎かにしたため、文帝と皇后に嫌われてしまいました。この状況を楊広（後の煬帝）が利用して自らの質素を宣伝すると共に、腹臣の楊素と張衡らによる文帝への讒言を行つて楊勇を廃立し、自ら皇太子の地位に就き、文帝の崩御とともに即位したのです。煬帝が父文帝を配主としたことは、単に隋王朝の高祖というのみならず、皇太子となつた経緯から内部分裂が勃発したり、あるいは篡奪王朝と認識される可能性があるため、文帝からの継承を正統化する意味合いも込められているといえましょう（拙稿「日本における昊天祭祀の受容」（『続日本紀研究』三七九、平成二十一年））。

桓武天皇の皇位継承は、光仁天皇からの讓位（禪讓）という形で、父系の正統性は保証されているはずです。しかし、初めての渡来系氏族を外戚とすること、立太子の時点から天皇自身が皇権の弱体化を認識していたと考えられます。また即位直後から度重なる謀反事件などによって、反対勢力が多く存在する朝廷内に

あつて、葬送儀礼の終了後に改めて自らが父光仁天皇からの正統な皇位継承者であることを示したのではないのでしょうか。立太子に光仁天皇も一度は反対し、藤原百川に押し切られ、洪々同意したという伝承も関わってくる問題でしょう。

六、平安遷都後の桓武天皇

その後、桓武天皇は遷都から十年で長岡京を棄て、延暦十三年(七九四)十月二十八日に、平安京へ遷都することになります(『日本紀略』延暦十三年(七九四)十月二十八日)。遷都までの詳細は省略しますが、新しい都の名前を「宇太京」ではなく、「平安京」と命名することがポイントとなります。これまでの宮都は、その地名がつけられていました。『日本紀略』延暦十三年(七九四)十一月丁丑(八日)条には、民が口々に「平安京」と号しているとあります。これには、即位直後からの度重なる謀反事件などで、政権が不安定であり、国家を安泰ならしめたいとする桓武天皇ご自身の希望もあるのではないのでしょうか。

時間ありませんので、怨霊等への対応は、延暦十一年(七九二)と延暦十六年(七九七)をあげてありますが、その他は、略年譜をご参照ください。延暦十一年(七九二)に皇太子安殿親王の病は、卜に早良親王(崇道天皇)の祟と出る。諸陵頭調使王等を淡路に遣わし奉謝しています(『日本紀略』)。また、延暦十六年(七九七)万国の安寧を祈るため、畿内七道諸国の名神に奉幣。また、天皇親ら南庭に立っている記事がみられます(『日本紀略』)。さらには、早良親王に崇道天皇と追尊、井上内親王を皇后位に復すということを行われました(『日本紀略』)。

これら怨霊等への対応は、今後詳細に検討していきたいと考えておりますが、現段階では、天皇自身の反対勢力への対応と同一視できるのではないかと考えています。つまり、単に怨霊に悩まされ対策に苦慮していたのではなく、桓武天皇にとって政権を安定的に維持するために必要なことであつたと考えられるのです。それ以上は今後の課題とさせていただきますと思います。

七、おわりに

今まで述べてきたことをまとめると、桓武天皇は、これまで独裁的な権力によって造都と征夷を断行したと一般的には先入観をもって見られがちでした。また、天智天皇系新王朝の樹立を意識していたと捉えられることも多かったと思います。しかし、その御生涯をたどると、違った視点が現れてきます。それは、降誕当時は父・白壁王即位の可能性は低く、また父の即位後も皇位に近い存在とは言えない立場にありました。藤原氏と反藤原氏の間の政権抗争によって擁立され、即位されるに至りますが、生母の出自の低さから政権は二分され、度重なる謀反事件となつて暴発することになりました。桓武天皇の御在世中の前半は謀反事件の処理に、後半は怨霊等の対策に終始した感が強いことがわかります。それら怨霊への対応も謀反事件と無関係ではないと考えられます。政権の安定の為に処罰された人々が主な対象であり、これは反対勢力への対応策と見て取れるからです。

桓武天皇にとって、天智天皇系の天皇として新時代を創出するという一般的なイメージよりも、常に反対勢力の動向を注視し、国家を安定的に運営することが在世中の重要課題と位置づけられるでしょう。崩伝に「当年の費えと雖も後世の頼りなり」と評されるように、平安京が恒久の都として定着した後に、偉大な天皇の評価として、天命思想や新王朝意識が桓武天皇に付け加えられた可能性あると考えられることを述べて、私の発表を終了させていただきます。ご清聴、どうもありがとうございました。

【荊木】ありがとうございます。佐野先生の方から、「桓武天皇の御生涯と祭祀」ということで、桓武天皇が即位に至るいきさつから、その治世の間の主な出来事についてご紹介いただくとともに、この桓武天皇の時代の祭祀についても新しい説を色々とお伺いすることが出来ました。

それでは、また佐野先生の報告につきましては、後でまた皆で討論すると致します。次に遠藤慶太先生の御発表をお願いしたいと思います。

〔発題二〕

桓武天皇と『続日本紀』

遠藤 慶太

【遠藤慶太】遠藤慶太です。どうぞよろしくお願いします。

はじめに

それでは、「桓武天皇と続日本紀」ということでお話をしたいと思います。すでに桓武天皇の生涯をたどる詳しい話がありましたので、少しだけお話しします。お付き合いください。

今から一四年前になりますか、平成十三年（二〇〇一年）の天皇誕生日に際して今上天皇が記者会見で『続日本紀』にふれてお言葉を述べられました。「お言葉」の全文は宮内庁のホームページに掲載されていますから、皆さんご覧になれると思います。

二〇〇一年は日韓共催のサッカーワールドカップが開催される前年です。今上陛下は日本と韓国との交流の歴史をふりかえり、「私自身としては、桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると、続日本紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感じています」とおっしゃいました。

桓武天皇をめぐって百済との縁があり、そのことは『続日本紀』に記されていることにふれられたわけですね。桓武天皇の母が高野新笠という百済出身の渡来人、その先祖をたどっていくと、百済の武寧王にたどりつくということなのです。実際に『続日本紀』をひもときますと、延暦八年の明年（七九〇）正月壬子（一五

日）条に出てまいります。

壬午、「皇太后を」大枝山陵に葬った。皇太后の姓は和氏、諱は新笠という。贈正一位乙繼の娘である。母は贈正一位大枝朝臣真妹である。後の先祖は百済武寧王の子、純陀太子より出ている。皇后は容姿も徳もすぐれて淑やかな方で、若い頃から評判が高かった。天宗高紹天皇（光仁天皇）が未だ即位されていない頃、娶って妻としたのである。今上（桓武天皇・早良親王・能登内親王をお生みになった……）

この『続日本紀』の編纂——「編纂」とは、さまざまな材料をもとに新たな書物をつくりあげることですが——は、桓武天皇の時代に完成しました。ですから桓武天皇自身が命令を出し、自分の業績を歴史書にまとめさせたということなのです。これは古代の歴史書ではあまり例がありません。

では、そもそも『続日本紀』とはどういうものなのか。ご承知の方が多いでしょうが、私も皇學館大学史料編纂所が作っておりました『續日本紀史料』と合わせてご紹介します。

一、『続日本紀』と『續日本紀史料』

古代では天皇の命令（勅）によって歴史書がまとめられます。その最初は『日本書紀』であり、最終的には六部の歴史書が完成しました。これを六国史（りっこくし）といいます。『続日本紀』は六国史の二番目にあたります。

『続日本紀』は文武天皇元年（六九七）から桓武天皇の延暦十年（七九二）まで、九五年間を全四〇巻にまとめています。ほぼ奈良時代を網羅し、政府がまとめた公式の記録でありますので、古代史の基本文献です。大学で歴史学を専攻した方なら、古代史の演習で『続日本紀』に取り組んだ経験をお持ちだと思います。

戦後、奈良時代の研究が非常に進みまして、ある面では、古代史は『続日本紀』を中心に進んできたと言ってもいいと思います。直木孝次郎先生編の現代語訳が刊行されていますし（平凡社東洋文庫）、林陸朗先生が注釈を出しておられます（現代思潮社）。さらに平成元年（一九八九年）からは決定版といつていい注釈が新日本古典文学大系のなかで刊行されました（岩波書店）。ですので、古代史を専門にしない一般の方でも、『続日本紀』にこういうことが書いてあるのかは、知ることが出来ます。

ここからは宣伝といたしまして、『續日本紀史料』という史料集の紹介をさせていただきます。『續日本紀史料』は、この皇學館大学の史料編纂所で作ってまいりました。今日は多いので一冊だけ持ってまいりましたが、全部で二〇巻二二冊あります。『続日本紀』が四〇巻ありますので、二巻分を一冊にまとめる原則でまとめてまいりますと二〇巻になりました。掲げた写真が『續日本紀史料』とその原稿検討会時の様子です。



古代史の史料として大変価値のある『続日本紀』とはいえ、先ほど申しましたように編纂物であり、記事のひとつひとつはとても短い。歴史書の条文とは、歴史上のことがらを要約し凝縮したもののなのです。ですので、奈良時代の歴史全体を見渡そうとするならば、『続日本紀』は大事なのですが、『続日本紀』だけではなくて他の史料を対照しなければなりません。

奈良時代であれば、幸いなことに木簡でありますとか正倉院文書が残っておりますし、仏像や仏典の銘文、土器の墨書や瓦の刻書などさまざまな文字史料があります。これらは編纂されていない一次史料として価値が高い。さらには神社の由来・寺院の来歴を記した後の時代の縁起なども、時と場合によっては比べる必要が出てきます。こういうものをまとめて史料集にすれば、奈良時代の事は全てわかる、それがあれば便利だというわけなのです。

言うのは簡単なのですが、史料集をまとめる事業は大変な労力が必要です。お金・時間・人間、何より周囲の理解、これが大変なのです。こういうのは恐らく、本来であれば地方の私立大学がやる事業ではないのだと思う。中国社会科学院の研究員から「本来であれば国がやる事業ですね」と言われたことがあります。

それをやろうとおっしゃられたのは、皇學館の学長をなさっておられた田中卓先生です。田中先生による『續日本紀史料』第一巻の序文には、次のようにあります。

もともと私共が史料編纂室を構想したのは、東大の史料編纂所が、前述のごとく六国史以降の正史編纂を目的とするのに対し、六国史時代そのものについて、『大日本史料』と同様な形の、編年史料集の必要性を痛感してゐたからである。

……現在の古代・上代史学界の水準からすると、六国史の記事のみで研究

することは不十分で、それを補ふ関係諸史料を集成し、これを編年に整理編纂することが強く要望されてゐる。そのため、これまでも、研究者個人によつて類似の試みがなされてきたが、それらは、或いは中断せられ、或いは部分的・個別的であつた。このことは、本編纂事業が単独で行ふことの困難であることを物語つてゐるばかりではなく、協同研究としても、それに要する陣容・時間・経費等において容易ならざることを示してゐる。そこで、私は、これを本学の百年にわたる長期計画として、史料編纂室の事業に位置づけることを企図したのである。（『續日本紀史料』第一巻序文 昭和六二年）

本来であれば、六国史の時代の史料集刊行は国家的な研究機関、つまり東京大学の史料編纂所が行うべき事業だけれども、ここがなさっている『大日本史料』の編纂は、六国史のある時代は対象としていない。だから、その六国史の時代を私も皇學館の方でやっていくのだ。ただし『日本書紀史料』というのは大変難しいので、その対照する史料が豊富で、研究者の関心も高い『続日本紀』を軸にして奈良時代の史料集をまとめようということで、編纂事業に着手なします。

これを本学の百年にわたる長期計画となさったというのが、昭和六二年（一九八七）三月でした。岩波書店の新日本古典文学大系『続日本紀』第一巻が出るのが平成元年（一九八九）ですから、それに先立って『續日本紀史料』第一巻が出てゐるのです。なんとかこれをずっと進めてまいりまして、平成二六年（二〇一四）三月にようやく完結することができました。その事業の詳しい内容・苦勞は、今日司会をしてくださったという荊木先生がまとめてくださっています（荊木美行『『續日本紀史料』編纂始末』、『史料』二四一、二〇一四年三月）。

この事業をふりかえってみますと、もちろん大きな成果は皇學館というところが、研究の基本になる史料集を作り学界に提供したということです。もうひとつは、事業を通じて人間を養成した面があると思うのです。人文科学とは、何と言

いまして人間の学問ですので、こういう編纂事業、史料を作ることを通じて学問が培われ、研究の次の担い手が育った。例えば、お示した原稿検討会の写真でいいますと、清水潔学長や岡田登先生、あるいは荊木先生や私ということになると思ふのです。私どもは編纂事業を通じて育てていただいた。周囲の理解がないとできない大事業であるというのはそういうところなのです。

二、『続日本紀』の成り立ち

では、この史料集の芯になる『続日本紀』とはどういうものなのか。古代史の入り口として注目度も信頼性も高い『続日本紀』なのですが、その成り立ちは複雑です。一言で申しますと、桓武天皇を抜きにしては語りえない歴史書だと思います。

今日のシンポジウムの案内では、「その25年にわたる治世は、『続日本紀』・『日本後紀』に記され、造都と蝦夷征討のために民衆は疲弊したと一般的には評されている」とあります。恐らく歴史の教科書ではそういう理解になっているでしょうし、教科書の根拠には、桓武天皇の崩御にふれた『日本後紀』の記事があるのでしょう。次のようなものです。

天皇は実名を山部といい、天宗高紹天皇〔光仁天皇〕の長子である。前の史記述がなかったので、こ。母は高野太皇太后という。〔桓武天皇は〕皇位に登ることで詳しく記しておく
以前に従四位下を授けられ、官職は侍従・大学頭を歴任した。宝龜元年に四品を授けられ、同二年に中務卿を拝任した。同四年には皇太子となった。光仁天皇が政務に倦み、仏教に心を深められたので、桓武天皇に讓位されたのであった。

天皇の徳はまことに高く、容姿は抜きんですぐれ、華美なものを好まず、遠くまで威徳をかがやかせた。皇位に登ってからは政治に心を砕き、内では

平安京などの造営を興し、外では征討を行なつて蝦夷を討ちはらつた。これらは当面には大きな負担であつたけれども、後世の頼りとなる恩恵である。

(『日本後紀』大同元年(八〇六)四月庚子(七日)条)

現代語訳で掲げました。桓武天皇の治績をふりかえつて、平安京の造営や蝦夷の征討は、当面には大きな負担であつたけれども、後代にとっては恩恵になる社会的資産を残した——こういう評価が三番目の六国史『日本後紀』に書いてある。簡潔な文章ですが、桓武天皇の政治的業績が浮かび上がる、よくできた経歴の紹介だと思います。

天皇の実名は山部といい、光仁天皇の長子である。この後に分註(二行の割書きの注釈)が入つていまして、「前の史書には記述がなかったのでここで記しておく」と書かれております。母は高野新笠ですね。

桓武天皇は皇位に登る以前に従四位下を授けられ、官職は侍従・大学頭・中務卿を歴任しています。従来の天皇とは大きく違う。私は桓武天皇の治績を考えると、充分に行政経験を積んで四五歳で即位したことが大きなポイントだと思います。

特にこの大学頭の経歴が桓武天皇の個性を表していると思います。奈良時代にどういう人が大学頭に任ぜられたのか一覽を作りますと、山部王(桓武天皇)に続く大学頭は吉備泉・淡海三船・藤原真葛・袁晋卿・紀真人となり、やはり一級の文化人がみえている。一人だけ言及するならば淡海三船です。この人は歴代天皇の名前を漢籍から選んだとされる知識人(坂本太郎「列聖漢風諡号の撰進について」、『坂本太郎著作集七 律令制度』、吉川弘文館、一九八九年。一九三二年初出)、石上宅嗣とならんで「文人の首」と称えられ、三度も大学頭に在任しました。つまり大学頭は専門性がなければ務まらないポストです。

山部王(桓武天皇)の大学頭任官時期はわかりません。しかし『続日本紀』宝

龜元年(七七〇)八月丁巳(二八日)条で大学頭から侍従に移っていますので、任官はこれ以前です。諸王の時代に一官僚として能力を評価され、拔擢されたのが大学頭であつた。したがって山部王(桓武天皇)は、お飾りの大学頭ではなく、漢籍であるとか中国の文化を自分で理解できる、そういう素質を持っていたのだと思うのです。

この点、『春秋』をめぐつて東野治之先生のご指摘があります(東野治之「遣唐使船 東アジアのなかで」朝日選書、一九九九年。一九九四年初出)。

あるいは光仁太上天皇の崩御を受けて桓武天皇と公卿の間で服喪期間の問答が繰り返されていますが(天応元年十二月三日・天応元年十二月二十七日・延暦元年七月二十九日など)、これなどは、桓武天皇が漢籍の学殖を背景に「あるべき礼制」から篤い孝の実践を求めたとみてよいでしょう。これに対して公卿たちは公務の停滞を避けたいので、服喪期間の短縮を要請します。

さて、『日本後紀』で注目したいのは分註です。「前の史書には記述がなかったので、ここで詳しく記しておく」とある。桓武天皇の経歴紹介は前の史書、つまり『続日本紀』にはなかった、だから『日本後紀』で書きましたと断りをしている。『続日本紀』が桓武天皇の在位中にまとめられているから、紹介を省いたのですね。

ところで歴史小説を書く勘所は、自前の年表を作成することだそうです(塚本『わが父塚本邦雄』)。この報告の準備で、桓武天皇と『続日本紀』について関連の年表を作ってみました。山部親王は三七歳で立太子し、即位は四五歳です。先ほどお話がありました藤原種継の暗殺事件は延暦四年(四九歳)、そして『続日本紀』が収録した最後の年は延暦一〇年です(五五歳)。

この後、『日本後紀』の範囲でどういう動きがあるのかを追いかけますと、延暦一二年(五七歳)に藤原小黒麻呂・紀古佐美を派遣して相地を行っている。長岡京の次の遷都先調査に踏み出しました。同じ年の正月二日には長岡京の内裏を出

て「東院」に遷ります。長岡の次の都をめざして、宮の解体に着手したからです。平成十一年（一九九九）の京都市南区・向日市森本町の発掘では墨書土器・木簡が出土し、桓武天皇の東院跡が判明しました（『長岡京跡左京北一条三坊二町（財団法人・向日市埋蔵文化財センター、二〇〇二年）』）。

桓武天皇はこの仮内裏にあつて蝦夷の征討を命じ、翌年延暦十三年（五八歳）、正月にはその派遣軍の総司令官に軍の指揮権の象徴である節刀を賜っています。仮住まいをしながら、ひとつは平安京となる新都を造らせ、他方で蝦夷の征討を進めている。まことに慌ただしい状況で、さらに『続日本紀』を作らせているのです。これはどうみても暢気な文化事業とはいえない。遷都と征夷に匹敵する重要性——歴史に対する強い執着があるのだという印象を受けます。

そして、延暦十三年八月一三日に『続日本紀』の後半がまず完成しました。すでにある『日本書紀』の続き（文武天皇元年（六九七）以降）ではなくて、天平宝字二年（七五八）から延暦十年（七九二）までの後半二〇巻を完成させたのです。同じ年の一〇月には蝦夷征討の戦果報告を受け、同日に都を平安京に遷す詔が出されます。

それからしばらくして延暦十六年（七九七）になってから『続日本紀』の前半二〇巻が完成します。六一歳のときです。後ろから作って前半を付け加え、この段階で初めて『続日本紀』というタイトルが決まります。

細部は省略しましたが、それでも『続日本紀』成り立ちが複雑なことはご理解いただけたかと思います。『続日本紀』は前半と後半は成り立ちが違うのです。桓武天皇はどうも後ろにこだわりのある。自分の治世を歴史書にまとめさせたいでしょう。ここがポイントです。

『続日本紀』は、奈良時代を網羅する歴史書だと申し上げました。しかし前半と後半では記事の密度が違う。これは『續日本紀史料』を作っている時に如実に感じたことでした。

前半の二〇巻は六二年間を扱います。後半の二〇巻は三四年間を扱います。そ

の年数と巻の数を考えただけでも倍ぐらい密度が違う。特に後半はひとつひとつの条文が長く詳しい。また『続日本紀』を作っている人たちが記事のなかに登場してきます。自分で自分のことを書く場面があるわけです。

前半と後半で編纂の総責任者も違います。前半の編纂責任者は菅野真道です。渡来人百済系で桓武天皇の側近、いわば子飼いで腕利きの官僚です。後半は当時の閣僚首班であつた右大臣の藤原継縄です。継縄も桓武天皇の側近で、『日本後紀』の伝記によれば人柄は温厚、大臣の子孫というだけで出世をした才能も識見もない人だとあります。辛口の人物評ですが、しかしそういう人だからこそ桓武天皇の側近としてやっていったのではないかと私は思っております。

といいますのは、桓武天皇が即位して間もない天応二年六月、六一歳で左大臣正二位にあつた藤原魚名が突然左降されたからです。原因は明記されておらず、魚名は没後に名譽回復されましたが、ともかく桓武天皇は治世のはじめに閣僚の首班である左大臣を斥けた（木本好信「藤原魚名」、『藤原北家・京』、岩田書院、二〇一五年』。以来、桓武朝を通じて左大臣は空位なのです（林隆朗「桓武朝廟堂の構成とその特徴」桓武朝。論』雄山閣出版、一九九四年。一九六九年初出』）。

ここからは評価が分かれるでしょうが、桓武天皇は即位直後から政治の実権を掌握し、自分の意志を反映させていくのではないか。それは前代以来の重臣を左降するくらい苛烈な面があり、早い段階で権力基盤を固めた。これが私の考える桓武天皇のイメージです。もし時間があれば討論の時に話させてください。

さて桓武天皇が即位するまで、大きな曲折があつたということは先ほどまでのお話の通りです。少なくとも桓武天皇は産まれながら皇太子・天皇となること約束されていたのではない。三七歳で立太子するまでは官僚であつた。父親の思いがけない即位、それから義理の母（井上内親王）と弟（他戸親王）が失脚することです浮上した。

なにより重い犠牲になつたのは、延暦四年（七八五）に早良親王が皇太子を廃され、やがて薨去した事件だと思います。桓武天皇にとって、血を分けた同母弟

である早良親王を皇太子の座から追わなければならなかったことは、重い宿命を背負ったと思うのです。

七三歳の父・光仁天皇からの譲りを受けて桓武天皇が四五歳で即位したとき、皇太子になったのが三二歳の早良親王です。ということは、早良親王は光仁天皇の意志で皇太子に立てられた。桓武天皇には既に八歳の長子がいいます(安殿親王、のちの平城天皇)。

延暦四年に重用してきた藤原種継が殺害され、それに皇太子早良親王が関与していると報じられる。そうなると早良親王は皇太子を廃さざるをえない。替わって安殿親王が皇太子に立ちます。早良親王は食を止められて薨去します。

桓武天皇はそういう大きな犠牲を乗り越えて、意欲を持って政務に励み治績を重ねてきた。だから自分が作った長岡京の時代までで一定の評価を歴史書に出したい——それが同時代までを扱った異例の史書『続日本紀』だと思うのです。

三、歴史と帝王

ところが完成後の『続日本紀』には記事の削除が行なわれました。これは『日本後紀』に明言があります。『続日本紀』に掲載されていた「崇道天皇」(早良親王)が「贈太政大臣藤原朝臣」(藤原種継)と不仲であったことは、ことごとく「破却」なさいましたとある(『日本後紀』弘仁元年(八一〇)九月丁未(二〇日))。

延暦四年の事件は、現行の『続日本紀』には記されていない。そのため藤原種継暗殺に早良親王が関わっていたとする記事は、『続日本紀』ではなく『日本紀略』という別の文献によつてはじめて分かります。これは『續日本紀史料』を作つていくと一目瞭然です(『續日本紀史料』第一九卷 延暦四年九月二八日条)。「続日本紀」とそうでない別の史料を並べていきますので、何が消されたのか、削られたのか、明らかなになります。

『日本紀略』の記事は恐らく、「破却」される前の『続日本紀』にあった記事に拠っているのでしょう。大伴家持以下が早良親王を担ぎ出そうとして、親王と対

立する藤原種継を殺害した。これは謀反であるから、関係者を処罰し、皇太子を廃するとの詔です。たいへん重要な記事ですが、これが後に『続日本紀』から削られた。それは早良親王が怨霊となったことに対する怖れ、憚りなのだと思います(山田雄司『怨霊とは何か』、中公新書、二〇一四年)。

では「破却」は誰の指示か。歴史書を作れと命じたのは桓武天皇ですので、削れと命じたのも桓武天皇だと思います。まことに重大なことで、君主が歴史に干渉した、介入した事例だと思います。これをどう考えるか、さまざまな評価がありうると思います。

ただ私は、『続日本紀』をめぐるこの事件を見ると、いつもある別の帝王を連想します。それは唐の太宗です。

太宗は指折りの明君と言われる皇帝ですが、太宗と歴史に関わつて次のような話があります。

貞観十四年(六四〇)に、太宗は房玄齡ぼうげんれいに言われた。「朕はいつも前代の史書を目にしているが、善いことは顕彰し悪いことは懲罰を加え、将来のいましめとするに足りるものだ。ところで古より当代の国史は、いかなる理由によつて帝王が親しく見ることでできないのだ」と。玄齡は答えて申しあげた。「国史が善悪を必ず記述するのは、人主が非法をしないことをこいねがうからです。〔もし見せたなら、ありのままに書いたことが〕御意にさからうことも有るのではないかと畏れるからなのです。ですから帝王は当代の国史を見るべきではないのです」と。

……太宗が六月四日の事を見たところ、記述には微妙な書き方が多かった。そこで玄齡に次のように言われた。「昔、周公旦はそむいた管叔・蔡叔を誅したので、周王室は安泰となった。季友は叔牙を毒殺したので、魯の国を安寧に保つことができた。朕がしたことは、この類に同じ行いなのだ。そもそ

も国家を安んじ万人の利益を思つてのことであつた。歴史書の編修官が執筆するのにな、どうして隠すような配慮が必要だろうか。中身の飾り立てた言葉は削り改め、そのことを直書すべきである」と。……

（『貞観政要』巻第七 論文史第二八）

すこし長めに引用しました。右は唐の太宗の言行を伝えた『貞観政要』の一節です。『貞観政要』は帝王学のテキストとしてよく読まれ、徳川家康が出版したことも有名です。

さて、引用したのは、唐の太宗が側近の房玄齡に対し、なぜ帝王は「当代の国史」（王朝で作成されている同時代史）を見てはいけないのだと問うくだりです。いわば「見たい」との意思表示です。

これに対して房玄齡は答えます。史書には善いこと悪いことはかならず記述します。それは君主が非法を行わないことを願つてのことなのです。ですから現在の君主がその記録をご覧になったときに、御機嫌を損ねかねないと怖れるのですよと。「閲覧はご遠慮ください」というわけです。

太宗はしかし側近の発言を押し返し、『高祖実録』『太宗実録』を見るのです。父と自分の治世がいかに記録されたかを目にした。その反応が後半部分です。記述の中で「六月四日の事」を見て、それが微妙な書き方になっていたので、書き直させた。

これは背景の説明が必要だと思います。唐の太宗は明君の誉れが高い皇帝ですが、しかし兄である皇太子を殺害し、父である皇帝を押し込めて二代皇帝になっている。これは武徳九年（六二六）六月四日に起きた玄武門の変です。太宗が歴史にこだわるのは、自分が即位した経緯を歴史はどのように書くのか、ここが知りたい。当然編修官は、「今の皇帝は兄弟を殺害しました」とあからさまに書けないので、「微文」でとどめている。ほかしているわけです。けれども、それを

太宗はこれでは「浮詞」だから、「直書」——ありのままに書きなさいと命じた。これだけ見ると、なるほど「直書」を命じた公平無私の皇帝だなと思うかも知れません。しかしもう一歩踏み込んで考えてみましょう。

太宗は「直書」にあたって、事件の評価を付け加えています。周公旦や季友といった古の聖人を引き、聖人が悪人を成敗したように、「朕がやったことも同じだ」と、こう言う。そのように書けと言うわけです。これは編修官に対して、評価の方向性を強いているのではないのでしょうか。こうしたことになるから、帝王は「当代の国史」を見てはいけないとの限定があつたのでしょうか。

もう一例挙げます。太宗に仕えた名臣・魏徴ぎぢょうの伝記にある挿話です（『旧唐書』魏徴伝）。魏徴に対する太宗の信頼は厚く、自分の娘を魏徴の子に嫁がせる約束までできていました。ところが魏徴の死後、魏徴は太宗に対して諫言したときの文書を控えていて、それを歴史書の編修官に渡していたことが明らかになります。太宗は「悦ばず」、手詔を下して婚礼を取りやめさせました。別に、魏徴の功績を讃えた碑をたおさせたとの話さえあります（『新唐書』魏徴伝）。強い不満を示したわけです。

これらのエピソードからうかがえるのは、歴史に対する強いこだわりです。それも自分の目を通さないとところで歴史が書かれることに対し、太宗はじつに神経質です。唐の太宗が歴史にこだわり続けるのは、いうなればクーデターによって即位した経緯に負い目があり、他人の評価、どのように書かれるのだろうかという気にしていたからだと思うのです。

そして、太宗にとつての六月四日の事に相当するのは、桓武天皇にとつての延暦四年の事ではないのか。桓武天皇もまた延暦四年の事を含む同時代史を『続日本紀』にまとめさせた。しかし後に事情が変わつたため「破却」したのだと思うのです。

先ほど桓武天皇の個性を理解するうえで、大学頭の在任したことが重要だと申

しました。桓武天皇は太宗の事を知っていたと思われる。根拠となるものを挙げておきます。桓武天皇のときの年号「延暦」の出典は、太宗が魏徴にまとめさせた類書『群書治要』に認められるのです。

『群書治要』は治世の参考となる文言をさまざまな典籍から抜き出した書物です。明君たる太宗のブランド・イメージがあつてか、やはり帝王学のテキストとなりました。徳川家康が古活字版で出版をした書物です。

さて「延暦」の部分は、『三国志』魏書・高隆堂伝を引いている箇所です。原文は「民詠「徳政、則延_レ期過_レ」_下有「怨歎、掇_レ録授_レ能。由_レ此觀之、天下之天下、非「独陛下之天下」也」、君主がいい政治をすると皇朝の運命は伸びるだろう、というくだりです。皆川完一先生は「延暦」の出典は不明としながら、『群書治要』のこの箇所を紹介されました(皆川完一「延暦」、「国史大辞典」第二卷、吉川弘文館、一九八〇年)。

ただ『群書治要』だと「延暦」つまり今使う「暦」ではなく、歴史の「歴」です。そこで「延暦」の出典を『群書治要』に求めることを懷疑した意見がありました(筆は亀田隆之氏。岩波書店、一九九八年)。

ところが桓武天皇が使っていただろう「延暦敕定」の印影が残っていました、こちらは歴史の「歴」で、「暦」ではないのです。そうすると出典は『三国志』であり、『三国志』を引用した『群書治要』でよいのだと思います。

この「延暦敕定」印が捺されているのが王羲之の書(「喪乱帖」御物、「孔侍中帖」前田育徳会尊経閣文庫)です。奈良時代にもたらされた王羲之の書に印記がある。「延暦敕定」ですから桓武天皇の鑑蔵印なのでしょう。唐の太宗も王羲之を大変愛好したのは有名で、古代の東アジアで二人の君主が同じように王羲之の書を愛したわけです。ともかく「延暦」という年号そのものが、出典の典籍や王羲之の書を通して太宗とつながる。

さて、最後に桓武天皇の崩御当日の記事、『日本後紀』大同元年(八〇六)三月辛巳(二七日)条をみておきましょう。この条文は三つの内容からなっています。

第一は「勅すらく」として、延暦四年の事で処罰された人たちを赦している。第二は崇道天皇(早良親王)のために諸国の国分寺で春秋それぞれ七日の間『金剛般若経』を読経せよとの命令です。そして第三が桓武天皇の崩御を記す。

第一・第二は延暦四年の事件に関する処置なのですね。つまり崩御直前まで、桓武天皇の胸中には延暦四年の事があつた。そこで私は、一度完成した『続日本紀』から早良親王の一件が削除されたのは、この頃ではないかと推測するのです。『続日本紀』には削られて今日目にするこの出来ない記事がある——しかし削られているという事実が、かえって『続日本紀』そのものの個性を訴えかけてくる。それは桓武天皇と『続日本紀』の特徴そのものであると思います。

むすび

報告のまとめに入ります。

歴史書とは、現在からふりかえって過去にあったことがらを記録に残したものです。ところが『続日本紀』では、巻によっては当事者たちが同じ時代の歴史を編んでいた。それが『続日本紀』の最大の特徴といえます。延暦の現在、桓武朝最初の一年間に非常に強い関心があつて、そこから歴史書まとめていった。まず桓武朝の歴史を作りたいという強い意志があるのです。

『続日本紀』も最後になりますと、桓武天皇の外戚に当たる百済王氏・土師氏の改氏姓記事が詳しく掲載されています。改氏姓を請願した上表が省略されることなく掲載されています。また編纂に関わった藤原継縄・菅野真道、こういう人たちが叙位・任官などで『続日本紀』のなかに登場します。

かかる現象は過去の歴史をまとめていくのとは、ちよつと性格を異にしている、やはり現代史・同時代史だと思う。さまざまな事があつた長岡京の時代まで一度区切りをつけ、自らの治績についての評価を歴史書によって確定させる。評価は後代にゆだねるといった態度とはまったく異なる。これが『続日本紀』の編纂

を命じた桓武天皇の意図であつたと思います。

しかしその後、早良親王の事件がぐつと重荷になって、怨霊という形で天皇を苦しめるわけです。親王は「崇道天皇」と天皇号さえ追尊されました。

その時、『続日本紀』は同時代史でありますので、同時代での事件の評価が揺れれば、歴史書の記述そのものが改変されたと考えればよいではないでしょうか。私の話は以上です。

【荊木】遠藤先生ありがとうございます。「桓武天皇と続日本紀」ということで、業務として行っている『続日本紀史料』編纂の話をお伺いすることができました。まだ色々お伺いしたいことがあるのですが、それは全員の発表が終わってから個別にお伺いするとして、一先ずこれでお二人の発表を終えさせていただきます。今二時五十分ですが、十分間休憩させていただきます。その後また先生の発表を再開したいと思いますので三時丁度にここに御着席ください。

（休憩）

【荊木】それではお待ちいたしました。休憩時間が終わりましたので、シンポジウムを再開させていただきますと思います。これまで、佐野先生や遠藤先生の発表の方を聞いていただきましたが、引き続きまして最後の御発表となります、『日本後紀』の桓武天皇紀」ということで、先ほどの遠藤先生のお話とも関わりますが、大平先生の方から『日本後紀』の桓武天皇紀」というタイトルでお話しいただきたいと思います。それでは大平先生宜しく願います。

〔発題三〕

『日本後紀』の桓武天皇紀

大平 和典

【大平和典】大平和典でございます。表題を「『日本後紀』の桓武天皇紀」といたしました。タイトルを先に決めてから内容を考えましたので、内容のそぐわないところがあるかもしれませんがご容赦いただければと思います。

一、『日本後紀』残存巻と逸文巻

さて、桓武天皇のご治世は、延暦十年（七九二）までは『続日本紀』に記され、延暦十一年以降、延暦二十五年三月の崩御までが『日本後紀』に記されております。まず『日本後紀』という史料について、自明のことが多くありますが、『日本後紀』は、嵯峨天皇弘仁十年（八一九）から仁明天皇承和八年（八四二）にかけて編纂され、桓武天皇延暦十一年（七九二）から淳和天皇天長十年（八三三）二月までの期間を対象としています。

その構成は、全四十巻から成り、巻一から巻十三までの十三巻が桓武天皇紀、巻十四から巻十七の四巻が平城天皇、巻十八から巻三十までの十三巻が嵯峨天皇紀、巻三十一から巻四十までの十巻が淳和天皇紀、にあてられています。

桓武天皇のご治世二十五年度のうち、十一年間は『続日本紀』、十四年余りが『日本後紀』に記されている、ということになりますが、ご承知のとおり、『日本後紀』は全四十巻のうち十巻しか現存しておりません。

現存十巻の内訳は、巻五・八・十一・十三・十四・十七・二十・二十一・二十二・二十四の十巻ですので、桓武天皇紀で現存するのは、延暦十五年七月から十六年三月の巻五、延暦十八年正月から同年十二月の巻八、延暦二十三年正月から桓武天皇が崩御され平城天皇が即位された後の大同元年九月までが巻十二から十四、

以上については『日本後紀』が現存しています。

ただし、現存十巻につきましても、中西康裕氏によって、巻十四・巻二十は収載期間が短く、巻十四は平城天皇即位や賀美能親王立太弟の宣命、叙位・任官記事の欠如など粗漏がみられることが指摘されています（『日本後紀』の編纂について、『続日本紀研究』三二、三三、平成十年二月）。その粗漏は、伝本書写の過程に生じたものでなく『日本後紀』編纂当時のものと考えられるということです。

『日本後紀』には以上のような制約があります。江戸時代より『日本後紀』は見つかりませんが、例えば水戸藩の『大日本史』編纂にあたっても徳川光圀は方々を探しましたが発見されず、塙保己一によって現存十巻が発見され、木版本が刊行され、その意義は極めて大きいところでありますが、実に多くの研究者が『日本後紀』を探しましたが今日までこの十巻しか発見されておりません。そして残存十巻についても、写本系統が極めて乏しい。ちなみに神宮皇學館大学の学長であった山田孝雄先生も、国史編修院長になられた時に、『日本後紀』の残欠を探したいという希望をもっていた、ということが、『日本歴史』の最近の号に掲載された中田易直氏の対談に出ていました（『国史学界の今昔（五）戦中・戦後の文部省学術行政（上）』『日本歴史』八一〇、平成二十七年十一月）。

そうした『日本後紀』探求の一方で、『類聚国史』や『日本紀略』をはじめとする諸史料から、『日本後紀』を復原する、逸文の蒐集ということも、江戸時代以来試みられてきました。早くは尾張藩の『類聚日本紀』や鴨祐之の『日本逸史』がありますが、これらが厳密には『日本後紀』の逸文といえない例えば『類聚三代格』なども採録しているのに対して、確実な『日本後紀』の逸文のみを集めたのが、昭和十六年に刊行された増補六国史本の『日本後紀』巻下で、佐伯有義氏の編になります。これが長らく使用され、『日本後紀』は、残存巻は新訂増補国史大系本、逸文巻は増補六国史本が使用されてきたわけですが、十数年前、平成十五年に集英社から訳注日本史料本が刊行されました。

訳注日本史料本は、『日本後紀』初の本格的な注釈書である、ということと、

残存巻と逸文巻を分けずに巻の順に並べていますので便利である、ということがその大きな特色としてあげられます。逸文巻についても、増補六国史本以降に諸氏によって報告された逸文も網羅していて、逸文集としても決定版といえます。あくまで管見の限りということになりますが、訳注日本史料本の刊行以後、文字を改めたり欠字になっているところを推定するような論文は発表されています（白井伊佐牟氏『日本後紀』延暦十八年十二月戊戌条の「譜諱」か『皇學館大学史料編纂所報 史料』二二七、平成二十二年九月、森明彦氏「平安時代貨幣研究の二、三の問題」『出土銭貨』三三、平成二十五年十二月）、それらは推定ですので検討の必要がありますし、条文そのものが新たに発見されるというような、新たな逸文の発見はそれ以後ないのではないかと思います。

そして残存巻についても、訳注日本史料本は、新訂増補国史大系本と同じく塙保己一の版本を底本として使用しています。新訂増補国史大系本と訳注日本史料本をおおまかに比較したところ、それほど大きな違いはありません。明らかな誤りなどを訂正したり、大系本が意によって改めているところをなおしたりと、妥当と思われる訂正ですし、新訂増補国史大系本から底本が変わったということもありませんので、残存巻についても、単に注釈書として便利というだけでなく、本文校訂も、安心して使える、と考えます（拙稿『書評 黒板伸夫・森田悌編『日本後紀（訳注）』史料としての『日本後紀』の研究も、平成十年からの五年間ほどの間に、伝来についての西本昌弘氏の研究（『日本後紀』の伝来と書写をめぐって）『続』の森田悌氏（『日本後紀』塙本の原本）『続日本紀研究』三二九、平成十二年十二月）や遠藤慶太氏（『日本後紀』の諸本）『皇學館大学史料編纂所報 史料』一八一、平成十四年十月）の研究、山本信吉氏の国史大系書目解題（『日本後紀』『国史大系書目解題』下、吉川弘文館、平成十三年十一月）など基礎となるような研究が相次いで発表され、一時期活発化しましたが、訳注日本史料本の刊行以後は落ち着いた感があります。

以上、今日『日本後紀』を利用するにあたって、残存巻本文の校訂、逸文の蒐集、利用の便、といったどの面においても訳注日本史料本が最もよい、と考えます。訳注日本史料本の編者である森田悌氏は、この本文をもとに現代語訳もされ

ていて、それが講談社学術文庫本ですが、歴史を専門に学んでいない一般の人でも『日本後紀』に接しやすくなりました。

それで次には、逸文巻は『日本後紀』をどの程度復原できているのか、という問題があります。『日本後紀』の逸文の大半は、『類聚国史』と『日本紀略』の条文ですが、この『類聚国史』と『日本紀略』による『日本後紀』の復原、ということについても、少なからず制約があります。

まず『類聚国史』ですが、『類聚国史』は、寛平五年（八九三）頃、菅原道真が宇多天皇の命をうけて編修が開始されました。六国史の記事を部門ごとに分類・配列したもので、六国史記事を省略などせずそのまま載録しているところに特徴があります。ですので、『類聚国史』が全巻残っていれば、『日本後紀』の全文も判明するのですが、『類聚国史』は全二百巻のうち六十一巻しか現存していません。

それから『日本紀略』ですが、『日本紀略』は、光孝天皇紀までは六国史を抄出したもので、光仁・桓武天皇紀については、現行の『続日本紀』にみえない藤原百川伝の引用や藤原種継暗殺事件関連記事がみられますが、そのあたりの事情は先ほどの遠藤氏のご報告にあったとおりです。こちらはとりあえず全巻揃っていますので、これによってもだいたい『日本後紀』を復原することができるので、桓武天皇紀を収める第十三篇は、その次の十四篇と比べると抄録の仕方が簡略だという指摘があります。平野博之氏によると、『日本紀略』が六国史をどう抄録しているか具体的に検討をされまして、前篇十三（桓武天皇紀）と十四（嵯峨天皇紀）では国史抄録の態度が異なっていて、十三は十二（光仁天皇紀）に近く、十四は十五・十六（仁明天皇紀）に近い。前者は、記事を簡略化する傾向がみられる、と論じておられます（『日本紀略の日本後紀纂記の抄録について』『下関市立大学論集』（二四・三）三一・一二、昭和五十六年三月／昭和六十二年九月）。具体的には、位階が四位の人物の薨卒伝を記事にとっているかどうかとか、人名表記で氏の名や姓を省略しているかないかとか、飢饉疫病の記事を採っているか

どうかとかを調べられ、さらには『続日本紀』『日本後紀』と『日本紀略』の文字数を比較しても、十三篇は十四篇よりも短く抄録しているとか、桓武天皇紀を含む十三篇は記事がより簡略化されているという指摘で、その点でも史料上の制約が認められる、ということになります。

このように、『日本後紀』は全巻残っておらず、その逸文の大半を占める『類聚国史』についても然り、また『日本紀略』も桓武天皇紀のところは抄録の仕方が簡略である、ということになります。さらには中西氏の指摘のように、桓武天皇が崩御された後、平城天皇即位を含む『日本後紀』の巻十四も、『日本後紀』編纂過程に生じた欠落が多い。

以上が、『日本後紀』の残存巻と逸文巻の現状、ということになるかと思っています。こうしたことが、この時代の研究にも制約を加えることになりますが、次に、延暦十一年以降の桓武天皇の時代、『日本後紀』の桓武天皇紀につきまして、レジューメの最後に年表を付けましたので、そちらを御覧ください。年表のゴシック体になっているところは、『日本後紀』が現存しているところ、という意味です。

桓武天皇のご生涯について特に議論されているのは、一つは佐野真人氏のご報告にもありましたいわゆる「新王朝」論や「革命思想」といった問題。これは瀧川政次郎先生が論じられて以来、通説となっています（『革命思想と長岡遷都』『京制並に都城制の研究』角川書店、昭和四十二年六月）。それから、桓武天皇の二大事業といわれる「軍事と造作」。「征夷と造都」という二大事業。これらが特に研究の蓄積も多いところであるかと思っています。

まず造都と征夷の二大事業ですが、この二つは、単に並行して行われたのではなく、両者は一体的に行われていたことが、福井俊彦氏などによって明らかにされています（『征夷・造都と官人』『史観』）。つまり、長岡京遷都の延暦三年には実施に至らなかったものの征夷の計画があり、長岡京後期造営がはじまったとされる延暦七年、その翌年、延暦八年には紀古佐美を征東大使とする征夷がありますが、これは官軍の敗北に終わります。この延暦八年の征夷については、『続日本紀』

に詳しく報告も出てきます。

そして延暦十一年から『日本後紀』に記されるところですが、この年は、まず早良親王の祟りが発覚するのがこの年です。延暦七年に藤原旅子、八年末に高野新笠、九年に藤原乙牟漏や坂上又子が次々と亡くなり、皇太子安殿親王も病となり、天然痘も流行しました。そして延暦十一年六月、皇太子の病は神祇官の亀卜の結果、早良親王の祟りが原因であると出ます。また延暦十一年には大雨や洪水といった自然災害も発生する。長岡京から平安京への遷都が公にされるのは、延暦十二年の正月ですが、長岡廢都の原因については諸説ありますが、和氣清麻呂の薨伝に、清麻呂の奏上によるが出てきて、遊獵に託して葛野の地を相した、現地を視察したとあります。桓武天皇の遊獵も延暦十一年から頻繁にみられますので、やはりこの延暦十一年に、長岡京の廃止と平安遷都について清麻呂の奏上があったと考えるのが妥当です。清麻呂は、長岡遷都から十年を経ても完成せず、費用もかさんでいる、ということで奏上したと薨伝にありますが、長岡京廢都の原因は高野新笠などが次々と亡くなり、さらに安殿親王の病、それが早良親王の祟りと出たということや、それから洪水による被害などが重なった、というように複数の要因を背景として、遷都に至った、というのが説として有力であるようですが(例えば、加藤友康氏「平安遷都と平安宮の政務」『古代の都3 恒久の都平安京』吉川弘文館、平成二十二年十月)、従うべき見解だと思えます。

そして遷都の準備が進められ、延暦十三年十月二十二日に天皇が新京へ移られ、二十八日に遷都の詔が発せられ、十一月八日に平安京と名づけられます。

ただしこのあたり、『日本後紀』の残っていないところでして、遷都の詔や、平安京と名づけられた詔などは『日本紀略』ではほとんど省略されています。造宮使についても、延暦十二年七月以前に設けられたことや、長官である造宮大夫に藤原小黒麻呂が任命されていたらしいことなどはわかりますが、『日本紀略』は任官記事など省略に付していますので、具体的な体制などとはつきりしない

ころが多くあります。延暦十五年ころには、造宮使から常設の造宮職に改組されたことも窺えますが、具体的なことは記録として十分に残っていません。

次にこの平安遷都と一体をなすという征夷についてですが、征夷も、延暦八年の征夷のち、翌九年から次の征夷の準備が始められまして、延暦十年には大使・副使を任命、延暦十一年閏十一月に大使・大伴乙麻呂が辞見、暇乞いをします。ただし、この弟麻呂は、十三年正月にも節刀を賜う、ということ、將軍や遣唐使が発する際に節刀を賜り、戻ってきて返却するわけですが、辞見してから節刀を賜るまで間が空きすぎている。これについて、鈴木拓也氏は、延暦十一年か十二年に計画していた征夷を十三年に延期した、それは遷都の立案がされたためで、延期したことによって、征夷の戦勝報告が新しい都で行われ、それに続いて遷都の詔を発することが同じ日に行われるという政治的な演出がなされた、とされています(「桓武朝の征夷と造都に関する試論」『文芸』「学芸文化」一三二、平成十四年三月)。弟麻呂の辞見から節刀を賜るまでに一年空くというのは不自然ですので、一案として可能性は有り得ると思いますが、限られた史料からなかなか断定はできません。

いずれにしても、延暦十三年の征夷、ここで坂上田村麻呂が登場し、そして今回は官軍が勝利するわけですが、準備段階は『続日本紀』から出てきますが、実際の征夷の具体的な経過や状況は『日本後紀』が残っていないために延暦十三年の征夷は詳細がわからないところが多くあります。『日本後紀』の弘仁二年条によつて大使以下の征夷使の人数構成と、今回総兵士数が十万であったことと、戦果として斬首四五七、捕虜一五〇、といった戦果があったことが残されているくらいです。

さて、征夷のありました延暦十三年、それから延暦十六年には、二度にわたり『続日本紀』が撰進されています。これはさきほどの遠藤慶太氏のご報告にあったとおりですが、この『続日本紀』の編纂を、桓武天皇の「新王朝」意識とからめて考える見解があります。ただし、その代表的なものである中西康裕氏

『道鏡事件』『続日本紀と奈良朝の政変』(吉川弘文館、平成十四年七月。初出は平成五年)『統紀』撰者の「地の文」を区別して、「地の文」には信頼を置かないということ是非常に方法的に問題がありますし、すでに多くの批判がなされているとおりに思います。

中西氏のような極端な説に接しますと、桓武天皇「新王朝」論というものが大きく解釈されすぎている嫌いがあるのではないかと危機感を抱きます。

新王朝論については、瀧川政次郎先生が長岡京遷都について論じられて以来、通説となっていますが、これに対して、長谷部将司氏は、レジュメにはあげませんでしたが、次のように述べています。「瀧川政次郎氏が提唱した『桓武の新王朝』という概念は、それ自体魅力的な概念であったためか、その後瀧川氏の思惑を超えて一人歩きしてしまっている感否めない。」(『書評 中西康裕著『続日本紀と奈良朝の政変』(史境)四六、平成十五年三月)ということや、「前代との断絶面と継承面を共に有した『桓武朝の新王朝』」(『日本古代の地方出身氏族』(岩田書院、平成十六年十一月)ということを強調されていますが、このあたりは非常に重要な指摘だと考えます。また仁藤敦史氏も、「『続日本紀』は基本的に前王朝との断絶よりもむしろ連続性を強調するのが目的であったと考えられる。」(『桓武の皇統意識と氏の再編』(国立歴史民俗博物館研究報告)一三四、平成十九年三月)とされて『続日本紀』編纂が天武系から天智系への王系交替を必然化する行為、「前王朝の失態をことさら演出したもの」という考えを否定されたり、あるいは「『桓武の新王朝』論は、正直なところその内実についての十分な証明がないまま肥大化している感がある。」(同)などと述べておられます。天智天皇系新王朝の創設ということに囚われすぎないという佐野真人氏の昊天祭祀についての研究成果(『日本における昊天祭祀の受容』(『続日本紀研究』三七九、平成二十一年四月、等)も大事な視点だと思います。「新王朝」という言葉から、どうしても断絶をイメージしてしまいましたが、前代からの継承、連続性というものが、革新性とともに有していた、と指摘する論者もあるということは、強調しておきたいと思います。

年表に戻りまして、『続日本紀』撰進と同じ年、延暦十六年には、再び早良親

王のことが問題になっています。延暦十一年の祟りは、早良親王の墓が放置されていたことに原因を求めて、同じ年の六月の勅で完結したようになっていますが、再び早良親王のことが問題になって、延暦十九年には早良親王を崇道天皇と追称するなど行われます。それから早良親王の祟りには、桓武天皇の晩年にも悩まされることになります。

征夷につきましても再び動きがあり、延暦十三年の征夷の後、延暦十六年に征夷大將軍坂上田村麻呂以下の任命があり、延暦二十年、節刀が授けられ、四万人が動員されて征夷が行われます。九月に戦勝報告がありますが、『日本紀略』ではその内容が省略されていて、詳しいことがわからないのは前回の征夷と同様です。とはいえ、延暦二十一年に胆沢城、二十二年に志波城が造営されたり、二十一年に阿豆流為と母礼が降伏しており、その戦果を窺い知れます。

そして、延暦二十四年には藤原緒嗣と菅野真道による徳政論争あるいは徳政相論といわれるものが行われ、軍事と造作の二大事業の中止という大きな方針転換がなされる、ということになります。

最終的に中止となりましたが、この二大事業の成果が、さきほどご報告にありました『日本後紀』における桓武天皇評、ということになります。

二、桓武天皇遺勅の存否

さて、桓武天皇の御代の延暦十一年以降についておおまかに概観したつもりですが、特に新王朝論に関しては、長岡京遷都や昊天祭祀、国忌の改廃、あるいは桓武天皇の御出自やそれに伴う氏族秩序の再編成などが多く論じられていますけれども、ことに桓武天皇の皇統意識ということに関しては、私自身、前々から検討したいと思いがままになっていることがあります、その一つが、直系継承意識と桓武天皇以後の兄弟相承、という問題です。

レジュメに簡単にまとめましたように、桓武天皇以後の皇位継承をどのように

考えるかということは、非常に難しい問題を含んでいますが、平城・嵯峨・淳和天皇という桓武天皇の皇子、三兄弟が皇位を繋いだ。なお、荊木先生の『古代天皇系図』た系図を、年表の後ろにコピーを貼っておきました。荊木先生の『古代天皇系図』(燃焼社、平成六年九月)は、桓武天皇までのものですので、桓武天皇の皇子女については省略しておられるところがあるのかと思いますが、ご参照ください。

そちらで確認できますように、桓武天皇の次、平城・嵯峨・淳和天皇と兄弟で皇位を継いでおられます。それが、桓武天皇の意思であるということ論じたのが、河内祥輔氏です(『古代政治史における天皇制の論』吉川弘文館、昭和六十一年四月)。河内氏の根拠としてあげられているのは、異母兄弟婚、桓武天皇と酒人内親王、平城天皇と朝原内親王・大宅内親王、嵯峨天皇と高津内親王、淳和天皇と高志内親王、というように、異母兄弟婚が四人の天皇に五組みられる、そしてその婚姻はすべて桓武天皇の在位中に行われ、桓武天皇の意思による、とされます。

このうち高志内親王・高津内親王・大宅内親王の三人は、延暦二十年十一月に、そろって加笄の儀、こうがいで髪を結うという成人儀礼ですが、これを行っているという事に注目されて、三組の婚姻はこの加笄の儀が行われるより先に決まっていた、桓武天皇は数多い男子の中からこの三人の男子を選び、これに皇女を配するという特別待遇を与えた、そしてその特別待遇は、皇位継承権の付与を公にしたものである、とされています。

この河内氏の説に対して、安田政彦氏の説は、三内親王の同時加笄というものが桓武天皇の血をより濃く後世に伝えるためのもので、「三親王に皇位継承権付与が公認されたとは考えない。」と論じられます。あくまで三兄弟の継承は結果的なもので、「桓武天皇は本来的に直系による皇統の確立を志向。しかし数多い親王の存在を考慮して、直系継承を補完するために、「桓武天皇と桓武皇后の間の血統」という枠を設定したのではなかろうか。」といったことを述べておられます(『大伴親王の賜姓上表』平安時代皇親の研究、吉川弘文館、平成十年七月)。ただ、あくまで状況的な判断ですので、

安田氏の説を確固たるものとしてとらえることは難しいですが、安田氏が、「桓武天皇も藤原種継暗殺事件による同母弟早良親王を滅ぼしたことが、心に大きなしこりとなったであろうことは、その怨霊に悩まされ続けたことから明らかである。従って、桓武天皇は兄弟相承の危険性を充分承知していたはずである」(同)と述べておられるところがありますが、それはまさにその通りだと思います。加えて、「新王朝」論などと論じられるように、仮に桓武天皇が、天智天皇系・天武天皇系、ということ強く意識したのであれば、兄弟相承ということが壬申の乱のような皇統分裂を生みかねないということを、桓武天皇は意識されなかったのか、という疑問を強く抱きます。

さて、桓武天皇が三親王の兄弟相承を考えていたとする河内氏の説は、三内親王の同時加笄などを根拠とした、あくまで推測の域を出ないものですが、その後、西本昌弘氏によって、「桓武が皇位継承者として想定したのは平城・嵯峨・淳和の三親王であったとする河内説には説得力がある。」とされた上で、『東宝記』という史料が紹介されます(『桓武改葬と神野親王廢太子計画』『続日』本紀研究三三九、平成十七年十二月)。

『東宝記』という史料に、次のような話が出てきます。桓武天皇の遺勅に、平城・嵯峨・淳和天皇と、三代が十年ずつ御治世有るべし、三代にわたって兄弟で継承することを定められた、しかし平城天皇は自身の第三皇子高丘親王を春宮に立てようとされた、などというような内容です。それから、『扶桑略記』などにみられる、平城天皇の神野親王廢太子計画なども検討されています。

これについて西本昌弘氏は、次のように述べておられます。

「桓武の遺勅云々は一見荒唐無稽にみえるが、桓武が安殿・神野・大伴の三親王に皇位継承権を付与したとする河内祥輔氏らの研究成果とも符合し、桓武以後の皇位継承過程を考えるさいには無視できない記述であると思われる。……こうした特異な皇位継承が行われたのは、本稿の想定によると、桓武の遺勅にもとづくものであったが、それでは、なぜ桓武は三親王による順々の

登極を望んだのか。それは天武系の皇統が天武―草壁―文武―聖武―孝謙・称徳と直系を追求してきた結果、最終的には行き詰まってしまったことへの反省からではないだろうか。兄弟の三親王が順次皇位をふめば、そのいずれの系統に皇位が継承されたとしても、桓武系の王統は安定的に継続することが予想されるからである。」(同)

と述べられまして、さらにその後もこの問題を扱われその思いを強くされたようで、最近刊行された岩波の日本史リブレットの中では、

「皇太子安殿親王―神野親王―大伴親王の順に皇位を伝えることを、桓武が遺言した可能性は高いものと思われる。」(『桓武天皇 造都と征夷を宿命づけられ
た帝王』山川出版社、平成二十五年一月)

とさらにその可能性が高いという表現になっております。

そこで、この西本氏が紹介された『扶桑略記』と『東宝記』。平城天皇の廃太子計画については、これはレジュメに史料をあげませんでした、年表の一番左のところにいれましたように、『扶桑略記』などにみられる説で、或説に、平城天皇に廃太子の謀計あるを藤原冬嗣が神野親王に告げたので、神野親王が柏原山陵に祈った、というようなことがみえています。

それから桓武天皇の遺勅が出てくる『東宝記』という史料ですが、こちらは史料をあげておきました。

内容は、桓武天皇が崩御される時、平城・嵯峨・淳和の三兄弟がそれぞれ十年ずつ在位するよう定められた。よってまず平城天皇が即位されたが、平城天皇は実子高丘親王を皇太子に立てて譲位しようと思われた。それで嵯峨天皇は桓武天皇の廟に詣で、訴えたところ、霧が立ちこめた。平城天皇は恐怖されて、十年のうち後半五年を嵯峨天皇に譲られた。

それで嵯峨天皇はその五年をあわせて十五年間在位されようと思われたが、平城上皇が末の五年間は桓武天皇のお考えどおり自身が御治世あるべきと仰せられた。けれども嵯峨天皇は承知されなかったので、平城上皇が平城宮において兵を

挙げ平安宮を責めようとする。よって嵯峨天皇の官軍数千騎が平城宮に向かうと、平城上皇側は戦わず散り失せた。これは空海の加持の力、八幡神の擁護の故である。というものです。

それで、まず『東宝記』という史料ですが、これは、東寺(教王護国寺)の寺史で、東寺観智院開基・杲宝(一三〇七―一三六二)という人の撰です。観応三年(一三三二)六巻本の初稿を脱稿、応安元年(一三六八)から応永三年(一三九六)まで三度にわたって杲宝の弟子賢宝らによって改訂。

この『東宝記』の「私に云ふ」の注記のところにでてくる話ですが、この「私云」という注記は、その殆どは杲宝の記と認められるが、中には後人の所為になるものも存在する、ということ(山本信吉氏「東寶記概説」『国宝東宝記』、西本氏は、
原本影印『東京美術』昭和五十七年二月)で、「刊本の記載と比べると、草稿本の記載は簡略である。草稿本の「私云」が杲宝の筆になるものとする、刊本の記載は賢宝が増補したものである可能性が高い。」

「〔弘法大師行状要集〕第三と『東寺私用集』第二の〕両書は『東宝記』『私云』後半部の記述を「源運僧都記云」として引用している。源運僧都は平安末期の人物であるから、こうした所伝は少なくとも平安末期まで遡ると考えられる。」

と述べておられます。ちなみに、刊本と草稿本といっておられますが、『東宝記』には草稿本と、清書本または中清書本、それと刊本とありまして、草稿本とか清書本、中清書本というのは国宝に指定されている本で、影印本が出ています。刊本は『続々群書類従』所収本です。刊本のほうはレジュメにあげませんでしたが、国宝本よりもさらに内容が増えています。

さて、『扶桑略記』や『東宝記』を用いる西本説に対しては、春名宏昭氏による批判があります(『平城天皇』吉川弘文館、平成二十一年一月)。春名氏は、『扶桑略記』や『東宝記』にある逸話について、『日本後紀』との齟齬を指摘されているのですが、特に重要

と思われる指摘は次の点だと思います。

『日本後紀』は総じて平城天皇に批判的だったから、もし『扶桑略記』の記事が本当ならば、差し障りのある表現は多少控えるにしても、平城天皇に遠慮することなく、原則的に事実の通りに記載したものと思われる。」

これは、『扶桑略記』の記事に、平城上皇が廢太子の謀計あり、とあるのを採用することに対する批判ですが、春名氏も言っておられるとおり、『日本後紀』は平城天皇に責任が及ぶのを憚る、というようなことをしておりません（（なお拙稿『日本後紀』における平城上皇に対する叙述』『皇學館大学史料編纂所報 史料』二一八、平成二十年十二月、参照））。例えば年表の、延暦十二年、佐伯成人が謀殺されたのは、或いは曰く、皇太子（（安殿親王））の密旨を受けて山辺春日らが殺害した、ということをはっきり書いています。この点、まさに春名氏の指摘のとおりだと思います。それから春名氏の指摘で注目したいもう一点は、

「信憑性に配慮しつつも、これらの史料（『扶桑略記』や『東宝記』）に依拠して、平城・嵯峨・淳和の三天皇の即位が桓武天皇によって構想され実現を予定されたものだったと考え、それに基づいて平安初期の政治過程を理解しようとする傾向にあるのだが、それは言い換えれば、これらの史料が真実の一端を語っていると考えているのである。しかしながら、話の核となる部分は『日本後紀』に依拠する限り事実とは齟齬があり、付け加えられた部分は話を面白くしようとか、嵯峨天皇の行為を正当化しようという意図が窺えるフィクションであった。」

したがって、私は平城・嵯峨・淳和の三天皇の即位があらかじめ予定されたものであったとは考えない。紆余曲折する政治動向の中で結果的に兄弟による皇位継承が行われ、嵯峨系の道康親王（文徳天皇）が立太子し即位することにより、紆余曲折状態が終息したものと考える。」
 と言っておられる部分も、重要な点だと思います。

ちなみに春名氏は、「平城天皇は桓武天皇の没後に即位しているから、桓武天

皇の意向による立太弟ということでもない。もちろん、生前の意向に従ったという可能性もあるが、平城天皇がその意向に縛られたとも考えがたく、結局、立太弟は最終的には平城天皇の判断だったということになる。」（「平安新王朝の創設」『王の天皇と権力』山川出版、平成十八年十一月））ということも述べていたりします。

桓武天皇の遺勅については、西本氏ご自身、「一見荒唐無稽」ということは認めておられますが、西本氏は、『東宝記』の記述と、河内氏の研究成果などが合致する、ということを根拠にされて、史実である可能性が高いと述べておられますが、この『東宝記』という史料については、古代史の史料として用いるにはかなり注意が必要だと考えます。

『東宝記』は、東寺に残されていたさまざまな史料を引用し、それに「私云」という形で撰者の地の文を加える形式ですが、引用されている史料については、山本信吉氏が「史料採訪にさいしての博搜ぶりが窺われる。東寺六芸文書や東寺百合文書からも多くの重要文書が引掲されていることは特に注目される。」（『東寶記概説』『国宝東宝記原本影印』東京美術、昭和五十七年二月））と述べられるように、その点は確かにそのとおりだと思います。

ちなみに、この『東宝記』の材料となった史料の一つに、『道我僧正記』あるいは『東寺草創以来事』とか『東寺縁起』とか呼ばれる史料がありまして、『東宝記』より早く成立し、『東宝記』に極めて近い内容であることが指摘されていますが、この史料は本学の図書館に所蔵されているもので、本学百二十周年の時に展示されています。その時に解説目録が作られていますのでまた御覧下さい（『創立一二〇周年記念特別陳列 皇學館大学所蔵の名品』『古文書・典籍』皇學館大学神道博物館、平成十四年十月））。

それはともかく、まず、「私云」として記された注記、そこに記された桓武天皇遺勅云々の所伝も、平安末期まで遡るのかどうか。西本氏が言及しておられる『弘法大師行状要集』や『東寺私用集』。『東寺私用集』は刊本が出ていないようですので確認していませんが、『弘法大師行状要集』のほうはレジユメの『東宝記』

の次に掲げておきました。

『弘法大師行状要集』というのは、弘法大師の伝記で、東寺観智院の賢宝という人の撰です。応安七年（一二七四）完成。賢宝は、『東宝記』の改訂をしたのと同じ人物です。この『弘法大師行状要集』の「私云」も、史料を引用した後に、賢宝が「私云」として書き加えたものです。それで『弘法大師行状要集』をみますと、「源運僧都記」として引用されているのは、神野親王廢太子の話で、確かにこの所伝は平安末期に遡る可能性があります。これは『扶桑略記』の記事などを考えても、『扶桑略記』は平安末ですので、確かに神野親王廢太子の逸話が平安末期に遡るというのは何ら不思議ではありません。一方の桓武天皇の遺勅の話はあくまで賢宝の「私云」のほうに出ていますので、こちらは別に考えるべきもの、ということになるかと思っています。

それから、寺院において逸話がいろいろ加えられていった、そうしていろいろ付け加えられた史料が、『東宝記』に引用された、ということも考えないといけません。例えば、久保田収先生のご指摘によりますと、「貞観寺御記云」という形で、真雅（（八〇）
（七九））撰と伝えられる『稲荷大明神流記』の一部が引用されていますが（（第一弘法上）
（密教相応事））、『流記』は吉野時代以前の成立、恐らく真雅に仮託してつくられたものです。賢宝の頃にはすでに真雅の作として伝えられていたので、「貞観寺御記」として引用されている、と言及されています（（高野山における神仏習合の
問題）『神道史の研究』皇学館
大学出版部、昭和四十八年
七月。初出は昭和四十二年。）。そういう史料も引用書にみえる。

それから、「弘仁官符」といわれるもの。「弘仁三年十一月廿七日施入田地」符文云」として『東宝記』にも引かれている史料があります。東寺の縁起には頻繁にみられる官符ですが、この文書の初出は、

承平二年（九三二）八月五日太政官符（平安遺文
四五六〇号）

承平二年（九三二）十月二十五日大神宮司解案（平安遺文
二四二二号）

というようなもので、どちらも弘仁三年十一月二十七日官符を引いています。し

かし、八月五日の太政官符案に引かれた弘仁官符と、十月二十五日大神宮司解案に引かれた弘仁官符は、文章が異なっています。前者のほうには、どうやら東寺による作為は加わっていないらしいけれども、十月二十五日のほうに引かれた弘仁官符は、「以三代々国王」以下『東宝記』で引用されている箇所を含め多く文章を偽作し加えている。つまり、もともと「弘仁官符」には「代々国王を以て」云々という文言はなかったものが、後から加えられた。文言をいろいろ加えた背景としては、八月五日のほうが東寺の大国莊のことを問題としているのに対し、十月二十五日のほうは大国莊に加えて川合莊のことを問題としているのに対し、の莊園争いの中で、文言が偽作し加えられている。そして承平二年とあるけれども、成立は十一世紀後半ごろであった可能性も高い。ということが勝山清次氏によつて明らかにされています（（東寺領伊勢国川合・大国莊とその文書―平安前・中期の文
房、平成二十一年六
月。初出は平成元年。）
書の本偽をめぐって―『中世伊勢神宮成立史の研究』塙書）。

さらに、真木隆行氏によると、加えられた文章というのは、東大寺の「聖武天皇勅書銅板」の裏銘（（十世紀段階の偽作。鈴木景二氏「聖武天皇勅書銅板と
東大寺」『奈良史学』五、昭和六十二年十二月、等参照））に酷似している。ほぼ疑いなく、「聖武天皇勅書銅板」裏銘の文言を利用して、弘仁三年十一月二十七日という日付も後世に下ると考えられる。

そして、東寺では弘安五年（一二八二）頃、蒙古襲来の頃より、東寺を「異国降伏之秘法」を修する「護国之基」とし、その興廢と国土・朝家の興廢とを一体視（（鎌倉遺文
一四六九七号））するような論理が見えるようになり、そうした中で「弘仁官符」などが利用されるようになった、といえます（（鎌倉末期における東寺最頂の論理
文書研究会編『東寺文書にみる中世
社会』、東京堂出版、平成十一年五月。）
『東宝記』成立の原風景―東寺）。

このように、東寺側の論理でいろいろと逸話が加えられている結果のものを、『東宝記』が引用している、ということになります。

念のために申し添えますと、『東宝記』についてすべてがすべて事実でない、ということではありませんで、例えば、空海と八幡神との関係ということが出て

きますが、今回問題としている場所でも、「弘法大師の加持の力、八幡擁護の故である」など出てきましたが、その空海と八幡神との関係については、久保田収先生が述べておられるように(前掲論文)、空海が八幡神を崇敬し、東寺の鎮守として八幡社が鎮祭せられたことは疑いない。

つまり、基となった歴史的事実があり、その事実、いろいろな逸話が加えられ補強されている、という側面もあるかもしれません。ですから、『東宝記』のすべてがすべて偽りということではなく、やはり他史料との比較によって慎重に判断することが求められると思います。

ただし、『東宝記』にいう桓武天皇遺勅に関しては、到底事実とは認めがたい、ということ、春名氏の指摘によって明らかだと思いますが、そうとすれば結局は、問題となるのは河内氏の説で、河内氏の本は、最近増訂版も出て、興味深い指摘も多いですが、そう言い切れるだろうか、と思われるところが少なくありません。今回とりあげた箇所につきましても推測の域を出るものではありません。

以上、結論を申しますと、西本氏の依拠される『東宝記』に従うには非常に問題がある。加えて、桓武天皇が三皇子の兄弟相承を示されたのであれば、壬申の乱のような皇統分裂を意識されなかったのか、早良親王とのご関係をどう思われたのか、といった疑問が残る。

そして何より、『日本後紀』にこのことがまったく出てこないのはどういうことか。『日本後紀』には、延暦二十四年正月、皇太子を召されて勅語された、あるいは、同年四月、皇太子以下参議以上を召し後事を託された、と出てきます。

平城天皇が即位された時のことは、『日本後紀』巻十四に不備が多いとはじめにふれましたが、嵯峨天皇から淳和天皇への譲位については、『類聚国史』(『日本後紀』逸文、弘仁十四年四月庚子条)に詳しく出ています。そこに、嵯峨天皇は、自身は嫡子でなく庶子であつたが思いもよらず皇位に即かれたことや、病によって、退位を考えられたけれども、平城太上天皇はこれを許さなかった、小人、不徳の者が現れて薬子の変

が起こった、在位十四年がたつて、宿願である退位、皇太弟に位を譲りたい、淳和天皇は辞退されたけれども、嵯峨天皇は弟を遇すること子の如くする、と述べられたことなど出ています。(なお、嵯峨天皇から淳和天皇への兄弟相承について、天長初期子氏「嵯峨上皇と淳和上皇」『日本後紀』序文の「二天両日」と堯・舜の喩」「『文学研究論集』二六、平成十九年二月。同氏がとりあげる史料に空海の願文「『遍照發揮性靈集』巻六、所収」もあり、遺勅の問題を考える際に注目してよいかもしれない。)

薬子の変について『日本後紀』が事実を伝えているかは異論がありましようが(私見は前掲『日本後紀』における平城上皇に対する叙述)、このあたりに話が出てこない以上、『日本後紀』は嵯峨・淳和・仁明天皇の御代に編纂されています、嵯峨・淳和上皇はご在世、淳和上皇は完成直前に崩御されますが、嵯峨・淳和上皇にとつてこのことの記載を憚る理由がないように思いますし、万代の宮を定めやがては近き先例ともなる桓武天皇が皇位継承について示されたのならば、不改の常典の例ではないですがそのことがどこかに出てきてよいのではないかと考えます。

さらに深く検討すべきところもありますが、少なくとも桓武天皇が兄弟相承の意思を示されたということはない、と理解します。

なお、レジュメには次に「三、和氣清麻呂薨伝」としてあげましたが、これは今後こういう問題についても検討したい、という程度のもので、時間があればふれようというつもりだったもので、もう時間のようですので割愛します。

〔コメント・討論〕

【荊木】以上、大平先生のご発表でした。これで、本日パネリストとしてご出席いただいた佐野・遠藤・大平三先生の報告が終わったわけですが、これを受けて、ご報告をベースにしながら本日の登壇者の間でいろいろと意見を交換してまいりたいと思います。

最初の佐野先生のご発表は「桓武天皇の御生涯と祭祀」ということで、その即

位に至る経緯をはじめとして、桓武天皇の波乱に満ちた生涯についての概要を解説していただくとともに、延暦四年におこなわれた昊天祭祀うてんさいしというものの性格について、新説といえますか、佐野説といえますか、桓武天皇ご自身には「新王朝」という意識はなかったのではないかと、というお考えを披露していただきました。ご報告では、桓武天皇の事蹟についていろいろお話がございましたが、やはり、今回テーマから外れるということで、軍事と造作についてはあまり言及がありませんでした。ただ、『日本後紀』をめぐる大平先生のご報告のなかで、ちょうどそれを補うかのように、『続日本紀』と『日本後紀』に跨またがって記される桓武天皇の軍事と造作についてかなり詳しいご紹介がありましたので、お二人のご報告をあわせると、桓武天皇の治世の様々な出来事がよく理解できると思います。ただ、やはり、聴講されているみなさんには、時間を追って桓武天皇の事蹟を把握することがむづかしいかも知れないので、時系列に沿っていくつかのことがらを確認しておきたいと思います。

まず佐野先生におうかがいしたいのですが、そもそも、桓武天皇が、長らく続いた平城京から長岡京への遷都を決めた大きな理由とは何なのでしょう。

【佐野】長岡京への遷都を決めたのは、やはり奈良時代の旧弊を打開するということを主眼に置いておられたと思います。それは、もちろん皇統が変わったということは事実ですけれども、本当にそこまで皇統意識があつたかということは疑問ですし、あるいは藤原勢力と反藤原勢力の抗争から離れるという意図もあつたのではないかと考えております。

【荊木】一般によく遷都の理由としてあげられるのは、寺院勢力の排除ですが、それについては、佐野先生はどのように考えていますか。

【佐野】寺院勢力の排除という一般的な考えに、基本的には従いたいと思います。今回は寺院勢力ということを入れてしまうと、なかなか即位まで発表が行かずに終わってしまうということもありましたので、藤原氏と反藤原氏の対立というこ

とに焦点を当てさせていただきました。一般的に言われている長岡京が遷都先に選ばれたという理由に、外戚の関係とか生誕地説とか色々あるかとは思いますが、けれども、藤原氏との政権抗争から一度離れたいという意図があつたのではないかと、いうことを考えております。

【荊木】ありがとうございます。平城京を捨てて長岡京に遷都したということは、桓武天皇の大きな決断であつたと思います。その理由については、今佐野先生からも紹介がありましたように、いろいろな学説があります。よく云われているのは、旧来の都である平城京は、寺院勢力が強大で、人心刷新の障碍となるが多かつたことも云われております。また、律令制の整備によつて全国の物資が平城京に大量に集まつてくるわけなのですけれども、平城京は、そうした物資運搬の交通の便がいいところではありませんでした。そこで水運に恵まれない平城京を捨てて、もう少し利便のいい、立地条件のいい土地をというようなことも桓武天皇の頭にはあつたのではないかと云われています。立証できるかどうかはわかりませんが、おそらく桓武天皇というのはかなり早い段階、つまり即位以前から遷都を考えていたのではないかと思われるふしもございます。わたくしの説明が長くなりますが、長岡京は長続きしません。長岡京が頓挫した最大の理由というのは、今日のお話にもしばしば出てまいりました、桓武天皇の寵臣の藤原種継つぐつぐ暗殺事件です。種継は、長岡京の造営の人頭指揮に当たっていた人物です。彼が暗殺された後、翌年には佐伯今毛人という別の人物が後を継いで造営を引き継ぐわけですが、それも延暦八年に亡くなってしまうということで、いよいよもつて、延暦十一年にはこれを廃棄するというような方針を取らざるを得なくなりま

す。その間に、桓武天皇の周辺に、身近な人が相次いで亡くなるというような不幸な事件がしばしば起こっています。また、廃都の宣言が出た延暦十一年の六月と八月に長岡京では豪雨による大きな洪水が二度も起こっており、度重なる身辺の不幸と、駄目押しのような水害で、この時期の桓武天皇は長岡京に嫌気がさし

ていたのではないでしょうか。そして、それが平安京への遷都のひとつの引き金になっていたと考えられるかと思っています。

なお、蝦夷の征討について一点補足しておきますと、これは、桓武天皇が急に思い立ったことではなく、父の光仁天皇の時代から蝦夷の制圧が国家的事業としてあげられていました。光仁天皇も、その実現に向けて色々策を打っていたわけですが、それを桓武天皇が継承したのです。先ほど大平先生から詳しいお話がございましたように、桓武天皇の時代の蝦夷征討では、三度にわたる大きな遠征が繰り返されています。最初は征夷大使と云いまして、紀古佐美という人物が任命されたのですが、どうもこの人はあまり将軍としては無能だったようで、あまり成果を上げることができずに、阿弓流為あてりいのゲリラ隊に散々やられて、ほうほうの体で帰京します。ただ、桓武天皇は、紀古佐美を信用しておられましたので、あまり厳しくは処罰しませんでした。その後、第二回の征討につづいて第三回の征討の時に、征夷大將軍坂上田村麻呂さかのうえのむらまろが登場します。彼の活躍によって、ようやく阿弓流為は降参いたします。最初の遠征が企劃されたのが延暦三年のことで、阿弓流為の征討が延暦二十一年という、ひじょう長い期間、桓武天皇は、倦むことなく軍事に力を注ぎます。これは、わたくしの個人的な感想ですが、桓武天皇は旧都の造営よりも、むしろこちらのほうが気になっていたのではないかという印象を受けます。

以上、桓武天皇朝の重要な出来事について補足させていただいたが、これを踏まえて、討論に入りたいと思います。

まず、佐野先生のお話のなかで新王朝樹立の意識云々ということが出てまいりました。これは、従来、桓武天皇の研究の中では、天皇は自分が新王朝の創始者であることを強く意識していたということが、瀧川政次郎先生たきかわまさじろう以来広く行き渡っている認識なのです。桓武天皇に関していくつか伝記がありますが、比較的新しい井上満郎先生いのうえみつろうの『桓武天皇』をみても、そうした瀧川説というのをベースに桓

武天皇の生涯を描いています。佐野先生におうかがいしたいのは、桓武天皇の事蹟のなかで延暦六年でしたか、大津の梵釈寺ぼんしゃくじを造営するというような、あれはやはり天智天皇縁りの寺院ですから、あの寺の造立を目指したということは、やはりご自分は天智天皇の皇統であるということをかなり意識していたのではないのでしょうか。その点については、いかがお考えですか。

【佐野】そうですね、今回は触れなかったのですが、その天智天皇に関して平安遷都した直後に「山背国」を「山城国」に、さらに先帝の遺跡の関係であるというところで、「古津」を「大津」と改称しています。梵釈寺はもちろん天智天皇を祀るために造営したのですが、奈良時代においても即位の奉幣や、その他の奉幣の時に天智天皇陵に奉幣をする事例が多々見られまして、桓武天皇が梵釈寺を再建されたからといって、私は天智天皇系の強い意識を持っていたということは思っていないですね。先ほど少し触れましたけれども、歴代君主の全員を祭祀の対象としていくのは毎日が祭祀日になってしま大変なことになるので、中国であつても、中国は宗廟ということで七代前までをお祀りいたします。君主が代を重ねてくると毎日が祭祀になってしまつて公務が滞ってしまいますので、どういった君主の方をお祀りするのかということは『礼記』祭法に一定の基準が決められております。その中にいくつか例がありまして、民に法を施した者、国政に従事し自分が命を賭して国事を勤めあげた者、苦勞をして国家を安定させた者、大きな災害を防いだ者、大きな国難を退けた者、この五つの事柄に当てはまる君主を祭祀の対象にしないということが述べられておられます。もちろん我が国では天智天皇というのは近江令を制定した天皇として有名です。律令を初めて制定したということで、天智天皇系から天智天皇を祀るということではなくて、奈良時代を通してそれ以降の天皇にとつても、天智天皇というのは我が国に初めて法律・律令を施行せしめた天皇ということで重要視されていたと思うのです。その点において桓武天皇は梵釈寺等を創建されたと考えています。

【荊木】かならずしも天智天皇の皇統であることを意識して梵釈寺を創建したわけではないということですね。わかりました。佐野先生のお説に関して、遠藤先生にもちよつとおうかがいしたいと思います。

【遠藤】新王朝説が成り立たないとの見解に異論はありません。そもそも遡って、天智天皇にしても天武天皇にしても兄弟ですし、それを先学が「新王朝」という耳に残るような言葉で表現なさった。そしてそれが独り歩きしていることは、大平先生のお話にあった通りだと思います。

折角なのでフロアの方もふくめて、おうかがいしたいことが三つあります。

大平先生のお話は、最近注目されている『東宝記』について、丁寧な史料批判をなさったと思います。それと対照的に、佐野先生は『水鏡』『扶桑略記』『百川伝』『愚管抄』と、時代の下がる史料を積極的に使って桓武天皇の時代の背景を描き出されたと思うのです。お二方の史料に対するアプローチが対照的でしたので、それぞれどういう感想を抱かれたのかなと、これがうかがいたいことの第一点目です。

二つめは、佐野先生のタイトルに入っていた「祭祀」です。神宮ですとか斎王、それから『儀式帳』が提出されることから考えると、桓武天皇朝と祭祀の問題は、研究開発推進センターで勉強していかなければならない大きなテーマです。それで佐野先生、またフロアにいらっしゃる久禮旦雄先生にうかがいたいです。昊天祭祀の紹介がありました。日本史上たぶん三回しかやっていないですよ——桓武天皇の時に二回、文徳天皇の時に一回、合計三回しか行っていない。郊祀は中国であれば毎年行う恒例の儀式だと思うのですけれど、これがなぜ日本で恒例化しないのか。もしお考えがあったらお聞かせいただきたい。これが第二点目です。

最後は、宗廟——みたまの位置づけです。儒教の礼の根幹である祖先祭祀では宗廟が不可欠です。しかし宗廟とその祭祀は、結局日本では定着しない。定着しないということは、この国では儒教を本格的には受け入れていないことと同

じではないのか。私などはそう思っています。宗廟とは、都城にあつて先祖の位牌にあたるものを祀る施設なので、陵でもないし神社でもない。大学頭も経験していて、昊天祭祀をしたようにすべてわかっているはずの桓武天皇ですから、桓武朝には宗廟祭祀が導入されてもいいのに、なぜ導入されなかったのか。もしご見解がございましたら、佐野・久禮両先生からご意見をいただきたいと思います。これが第三点目です。

【荊木】では、最初の史料の取り扱いについて大平先生の方からお願いします。

【大平】そうですね、『水鏡』を佐野さんは利用されたわけですけど、『水鏡』という史料は『扶桑略記』という史料に依拠していると思いますけれど、慎重に扱うべき史料だとは思いますが。

【荊木】そもそも、『水鏡』とはいかなる書物なのか、佐野先生、ちよつと説明をお願いします。

【佐野】『水鏡』は、新訂増補国史大系本に入っておりますが、所謂「鏡もの」のひとつで、『大鏡』『増鏡』と合わせて「三鏡」と言われております。神武天皇から仁明天皇までの千五百二十二年間の事績を記して、中には六国史などと異なる記事もあります。また、非常に中世的な史料になります。もちろん桓武天皇朝の事を記している記事もありますが、後世にもろん纏められたものですので、延暦の頃の一級史料というわけではありません。ただ、今回もあくまで「参考」と強調させていただきますが、実際に正史に書いてないので詳細は全く不明なのです。はつきり言えば、わからないとしか、言えないです。当時の事がはつきりわかる一級の正史というものは、史料的に『日本後紀』と『日本紀略』くらいしかありません。そうすると、やはり、今後慎重に引いていかなければならないのですが、『水鏡』が完全に嘘かでつち上げかというところ、そうでもないと思います。ある程度の事実は伝えながら後世に脚色して膨らましているところはありますが、それを吟味しながら使っていかなければいけないと思っています。実際にな

かなか『水鏡』には面白い諸伝が結構ありますので、食いつきたくなるなどというのはありますが、あくまで「参考」ということで、「こういう異伝もあるよ」ということを紹介するのには、やはり実際の正史に記載されていない異伝があるということを紹介していくということも必要であると思います。つまり、一つの過去を遡るための材料として提供する必要があるのではないかとということです。

【荊木】『水鏡』には二系統写本があるのですよね。その点はいかがでしょう。

【佐野】一般的な『水鏡』というものと、『流布本水鏡』という二種類系統がわかれています。『水鏡』の二種類の系統は説明しだすと時間が足りなくなってしまうし、今日は一般の方も多くみられますので簡単にだけ申し上げまします。国史大系に収録されて『水鏡』で申し上げれば、『水鏡』と言われているものが漢字・片仮名で書かれていて、一般的に流布したと考えられている所謂『流布本水鏡』は平仮名混じりで書かれているという違いがあります。『水鏡』だけでも、それこそシンポジウムできるくらい、写本系統の問題から始まり、様々な諸問題がありますので、この辺にさせていただきますとは思っています。

【荊木】『水鏡』は後世の書物ですし、取り扱いがむづかしいところもあるかと思っています。みなさまがご存知のことでは、孝謙太上天皇と道鏡の親密な関係について、あからさまに書いておられて、少しゴシップ的な要素があります。佐野先生がおっしゃったように、たしかに面白い史料で、つい使いたくなるのですが、そのあたりは、やはり史料批判を慎重に進めていかなければいけないと思います。

それでは遠藤先生からご指名のありました、久禮先生いかがでしょうか。昊天祭祀の恒例化と宗廟の話を合わせて、コメントをいただきたいと思っています。

【久禮旦雄】京都産業大学非常勤講師の久禮旦雄でございます。せっかくの機会ですので簡単にお答えさせていただきたいと思っています。昊天祭祀については、やはり私は河内春人氏の説というのを一応ひとつ考える必要があるかと思っています。三度行われたといわれたのは、桓武天皇の時に二回、文徳天皇の時に一回であり、

つまるところ、皇太子がちよつと頼りないなという天皇が実施するという節があるということ。結局のところそれは、親子間の継承が頼りないというときに、つまり直系の皇統という中国的な家の在り方を、いわば正当化する昊天祭祀が担ぎ出されてくるということになるわけです。そういう点で言うと、ではなぜ桓武天皇に始まったのかということになるのです。これについては、桓武天皇はやはり佐野説をお話いただいた通り自分の血統がやはり少し自信がないので二回行うわけです。また一方で生母を武寧王の子孫であるというように言いました。実に今上陛下はよくわかつていらつしゃって、あくまで『続日本紀』にそう書いてあるとのみ仰っておられます。実際にはよくわからないのですが、武寧王の子孫であるということは、百済の神様の子孫が私の母であるということをやっているとします。一方で、昊天祭祀で光仁天皇を配祀することによって私の父もまた神である、いわば東アジアの神の血統に私は繋がるのだということをするために行ったのではないだろうかということを考えています。あるいは、今日佐野先生が仰ったように、天照大御神との微妙な関係というものに関わってくるのかもしれない。それが文徳天皇の時に呼びさまされて昊天祭祀をもう一度やろうということになったのですが、結果的にその後日本において皇位の直系継承というものが一応は続きますけれど、常に母系的なものが摂関政治なんかで呼び起されてくるということになると、やはり定着はしにくくなったのではないかと思います。それぞれ個別の事情を考えないといけないと思いますので、そうかもしれないということです。

宗廟についてですけども、これなどは、やはり同様の事があって、都城において神を祀る、先祖を祀るといったときに、これはつまり「宗廟社稷」の問題ということになるわけですけれども、今野文昭さんが、神武天皇陵が藤原京近くにあり、あるいは宗廟じゃないかというようなことを仰っておりますが、それはともかくといったしましても、やはり神社というものは背景に自然があれば機

能しないというようなものがあるいはあったのかもしれないと思うわけです。そうした場合に、全く人工的な空間である都城の中に宗廟を設けるということに対してはやはり違和感があったのではないかと思います。散々無理して作ってみたら伊勢神宮みたいな自然の空間の中に都城的なものができるということになるのかもしれませんが。そういう点で中国的なものを導入されて自らの権威を正当化されようとした桓武天皇ですが、やはり日本のなものとの関係というものがそれをうまく機能させなかったのではないだろうかという形にまとめられるのではないかと思います。

【荊木】ありがとうございます。同じ質問を佐野先生にもいたします。お答えいただけますでしょうか。

【佐野】まず皇天祭祀が行われたのは、先ほどからお話しにでてまいりますように、延暦四年と延暦六年、そして文徳天皇の斉衡三年の三回ということになります。史料四十六・四十七に今回は延暦四年と六年の昊天祭祀について挙げさせていただきました。ここで注目すべきなのは、延暦四年の記事は簡略で、延暦六年の記事が祭文など詳細に記載されているということです。かつて史料編纂所論集に清水潔学長が『続日本紀』の年中行事（『創立十周年記念皇學館大学史料編纂所論集』所収 平成元年）という論文を書かれました、『続日本紀』の掲載方針というのは特筆記事を書き、恒例の年中行事は書かないのが『続日本紀』の年中行事の採録の仕方であると述べられております。つまり、本来書くのであれば延暦四年の方が特筆すべき記事のはずです。それは我が国で初めて昊天祭祀が行われたという特筆すべき出来事だからです。つまり通常ならば延暦四年に特筆として記事を所載し、延暦六年は簡略すべきだと思います。しかし反対に延暦六年の記事が詳細であるということに注目しなければなりません。つまり桓武天皇にとっては延暦四年の祭祀よりも、六年の祭祀の方が重要であったと認識されていたというのがまず考えられることの一点です。中国では基本的には毎年やるというのが建前です。皇帝が親ら行うとい

うのは建前なのですが、毎年行うことは、やはり中国でも大変だったようです。皇帝が都の郊外まで行幸されますし、『大唐開元礼』を見ると、年に何回の祭祀が毎年行われるということになります。それを全部やっていたら大変な事です。皇帝も建前は自分が行くことになっているのですが、日本と同じように勅使を以って行うのが中国でも基本でした。皇帝親らが行うというのは即位直後くらいに限られております。したがって、日本でも桓武天皇親らが祭祀を行わないで、日本でも勅使を遣わせて行っているという共通点があるのが一点です。では斉衡三年についても考えたいと思います。本来の昊天祭祀は、冬至の日に行うお祭りなのですが、斉衡三年は実は冬至の日に行っていません。冬至の日から十日程度遅らせています。斉衡三年の冬至は十一月十七日にあたりますが、実際行われているのが十一月二十五日に行われています。では、なぜわざわざ遅らせたかという、ちょうど十六日が新嘗祭の日で、十七日が辰日節会、つまり新嘗祭に付随する節会が行われておりました。つまり新嘗祭を優先して行われているわけです。そのあたりに昊天祭祀が定着しなかった問題と関係があるのではないでしょう。新嘗祭のお祭りというのが日本では大事なお祭りとなりますので、この新嘗祭を優先するというのが当然なのです。そうすると、新嘗祭はやはり、天皇にとって重要な祭祀ですので、定着させるつもりがあったのかどうかということ自体が疑問となってくると思います。つまり桓武天皇にとって、延暦四年と六年の二回だけでよかったのではないかと、定着させる意図はなかったのではないかと、うのが少し考えているところです。

宗廟についてですが、「宗廟」という言葉は『続日本紀』、あるいは『日本書紀』にも出てまいります。一般的な中国でいう「宗廟」という意味では使われていないということを前置きさせていただいた上で、日本に宗廟を導入することはありませんでした。なぜかと言いますと、中国は山陵・陵墓の祭祀が衰退してほとんどあまり行われない、墓を暴かれるということがあるため、王朝の変遷が

続く中国では、山陵の祭祀なかなか行われないうのが現状だろうと思います。それとは反対に、日本では陵墓での祭祀を重要視しています。毎年年末に荷前奉幣を行ったり、先ほどから言いましたように、即位の時に山陵に奉幣に行ったりしています。今でも歴代天皇式年祭が御陵で行われたり、陛下が昭和天皇の御陵である武蔵野陵などに行幸されたりしています。日本では御陵の祭祀が重要視されているという相違がありますので、宗廟を導入するというのではなく、日本では古来よりの山陵での祭祀を実施していくといったことがあったのではないかと考えております。

【遠藤】大変よくわかりました。本当にありがとうございます。

【荊木】それから大平先生にお伺いしたいと思います。『日本後紀』の復元で『類聚国史』と『日本紀略』の二つが中心となるというお話でしたね。『類聚国史』は、菅原道真の編纂と考えてよろしいのでしょうか。

周知のように、『類聚国史』は、『日本書紀』から『三代実録』までの六国史の記事というのを、項目ごとに類聚・整理したものです。ところが、最後の『三代実録』が完成する以前に編者の一人菅原道真は、大宰府へ左遷になっています。だから、完成をみないまま九州へ下向しているわけです。『類聚国史』は『三代実録』の記事をどうやって取り込んだのかはよくわかっていません。今日会場にいらっしゃっている杉野嘉則さんは、そのような研究をしておられたので、あとでうかがいたいと思いますが、まず大平先生はどうお考えでしょうか。

【大平】レジュメの方には、一の②の所でしたが、菅原道真が宇多天皇の勅命により編集開始とだけ書かせていただきました。編集の開始については菅原道真ですが、左遷のあとのことは議論があります。そのあたりについて私はこれが正しいという所まで深く検討しているわけではないので、専門の杉野さんにお任せします。

【荊木】それでは杉野嘉則さん、コメントをお願いしますか。杉野さんは本学

の大学院の修了生で、大学院在学中に『三代実録』の研究をされました。よろしく願います。

【杉野嘉則】杉野嘉則でございます。ずいぶん研究から離れて時間が経ってしましますので、久しぶりに大学に戻ってまいりました。『類聚国史』の話ですけれども、大学で研究していただいたときは、坂本太郎氏がやはり『類聚国史』全てを全巻にわたって菅原道真が編集していたのだということで通説となっていました。しかし、私は『三代実録』のみの項目を検討したところ、その項目に錯脱があるのではないかとということを考え、『三代実録』のどの部分までかというのは難しいのですが、菅原道真が大宰府へ流されているということも考慮して、道真ではない後人の追補ではないかなと考えております。また、高校教員なので研究する時間がなかなか取れないのですが、今後少しずつやってみたいかなと思いますので、また研究成果が出ましたらご報告させていただきますと思っています。

【荊木】その追補した後人とは、具体的にどういう人をイメージしていらっしゃいますか。身近な人物ですか。

【杉野】菅原道真の子孫ということになりましたか。

【荊木】これは、『日本後紀』の復元にもかかわる重要なことなので、杉野さんにもお伺いした次第です。大平先生の後半のお話で、ひじょうに興味深かったのは、桓武天皇の御遺言です。大平先生の説を、もう一度確認しておきますと、『東宝記』の記事は事実ではない、したがって、平城・嵯峨・淳和三天皇が相次いで皇位を踐んでいるが、それは桓武天皇が生前に遺言していたわけではない——そういうお考えでよろしいですか。

【大平】はい。

【荊木】ただ、桓武天皇ご自身は、やはり、自分の後の皇位をどうするかというような問題について頭を悩ませていたというところがあったのではないのでしょうか。そのあたりはいかがでしょうか。

【大平】少なくとも、皇子三人が続いて皇位継承するという詔が下されたことはないと思います。具体的にどういう皇位継承を考えておられたかについては憶測で物を言うのも問題がありますので、今後の課題とさせていただきます。

【荊木】唐突な質問だったかも知れませんが、これも重要な問題です。じつは、桓武天皇はたいそうな艶福化でございました。記録に残っているだけでも二十八人の后妃がおり、皇后以外に二十七人の女性が後宮にいたことがわかっております。そして、そうした女性との間に生まれた御子だけでも三十五人いたといわれています。いま大平先生のお話で話題になった三皇子はそのなかのとりわけ重要な親王なのです。

たとえば、徳川家康などもそうなのですが、子沢山こざさんの人というのは子供たちの行く末というのを心配して、ずいぶんいろいろな配慮しています。桓武天皇などもそうした心理がどこかにあったのではないでしょう。そのあたりを大平先生はどうお考えなのか、ちょっとおたずねした次第なのです。おかしな質問で申し訳ございませんでした。

それから佐野先生におうかがいしたいのですが、先生は目下センターの神道研究所におきまして、『皇太神宮儀式帳』の校訂・注釈にお一人で従事しておられます。せっかくの機会ですから、桓武天皇朝における儀式帳提出の意味について、先生のお考えを聞かせいただければと思います。

【佐野】久禮先生が論文で儀式帳提出の意図を書かれておりますので、神道研究所の立場もはっきりと申し上げなければなりませんので、まだ私もほんやり構想がある程度です。しかし、虎尾俊哉先生が『弘仁式』の編纂材料にされたということ述べておられます。また、去年はこの神道研究所のシンポジウムで加茂正典先生が、遷宮の為に神宮側から提出したのだと述べています。こちらは『研究開発推進センター紀要』第二号に掲載されますが、このような諸説があります。そのようなことを考えながら年表を辿っていくと、ちょうど『弘仁

式』の準備ということもあるかと思いますが、儀式帳の提出が延暦二十三年（八〇四）でちょうど桓武天皇の晩年に当たっているわけです。そうすると、その時期は早良親王関係の記事とか多くなっていますが、延暦十八年（七九九）に氏族の本系帳を提出させるなどのことが行われております。そうすると、ちよつと怨霊のところでも課題とさせていただきますと言ったのですが、早良親王の怨霊というのは非常に強い怨霊で、何が強かったかという祟りが酷かったとよく言われます。大伴氏・佐伯氏などの派閥の人々を抑えるという意味もあるのではないかと思います。早良親王が実は罪がなかったけれども、廃太子となり配流され餓死した。そして怨霊になったと言われます。大伴氏などの反藤原勢力の象徴として早良親王を置いているのではないかということも考えられてくると思います。そして、ちよつどその時期に本系帳など提出させて氏族を抑えていく、そのような政治プロセスの中で、あるいは各神社、あるいは祭祀というものを掌握していく必要性を感じて提出されたものではなかったのかと考えています。そして、それが将来的に『弘仁式』の材料になるものに使われていくと思いますが、いま述べたような過程の中で儀式帳の編纂というのが行われて提出を求めたのではないかと、おぼろげながらまだ確証はございませんが、そういった認識を持っております。

【荊木】ありがとうございます。せっかくですので、久禮先生にも一言お願いします。

【久禮】私も今言われて、さて私は数年前に何を書いたかなと今思い起こしている所であります。一つにやはり、いま佐野先生が仰ったように、桓武天皇は今までよくわかっていなかった神社祭祀の具体的なことを文字化して、提出させるというのをやはり意識していたのではないかと思います。その点で言えば、非律令的とも言える在地の在り方まで文字化して提出させることによって掌握するというものではなかっただろうかという気がいたします。ここまでではっきり言っ

ていいのか分かりませんが、斎宮歴史博物館の榎村寛之先生などは、もしかしたらあの時代においては神前説経をしていたかもしれないことを仰っております。そこまで言えるかどうかかわからないけれども、地元で様々なものを入れていて、在地祭祀と言っても地元の祭祀ではなくて、色んなものが勝手に入ってきてそこでやっているという現状に対して桓武天皇は介入し、実際に皇太子時代に拝みに行かれたわけですから、その時に参拝して、一体この人たちは何をしているのだろうかと思われたのかもしれませんが。そうやって掌握することによって、自らに神祇支配に対して介入して、国家の元で神祇祭祀を一つにすること、その点では佐野先生の御説に蛇足のように付け加えさせていただくという形となりました。では失礼いたします。

【荊木】ありがとうございます。だいぶ時間も残り少なくなってきましたのですが、佐野先生・遠藤先生・大平先生、ご報告のなかでなにか言い残したことや、これだけは訊いておきたいということがございましたら、どうぞ。

大平先生、和氣清麻呂についてはなにか補足がありませんか。

【大平】今後考えたいと思います、文字通りそういうことなのですが、『続日本紀』に出てくるところと、それから『日本後紀』の和氣清麻呂の薨伝に出てくるところでは、上下に分けてみましたけれど、同じ事件の記述でも、傍線を引いたところは文言が違う、それから太字したところは一方にあって一方にない、そういうようなところがあります。このあたり深く検討された長谷部将司氏という方がおられますが、それによると、和氣氏側の立場で色々加わっていったものが国史に採用された、そういう説かと思います。レジュメの一番最後に引用しました平泉澄先生の「神道の本質」というご文章では、この問題についてまた違った見解を述べておられますが、神託事件の研究で参照されることがありません。平泉先生のご指摘を考慮して改めてこの問題を検討したいです、という程度です。

【荊木】ありがとうございます。あの有名な道鏡事件のときに、大宰主神の習^す宜阿曾麻呂^{げのあそまろ}という人物が、道鏡を皇位に据えるという八幡の神の託宣をもたらします。その真偽を確かめるために、和氣清麻呂^{わけのきまろ}が派遣されたわけですが、そのあたりの経緯について、『日本後紀』の和氣清麻呂の薨^{こうでん}伝の記事と、実際に神護景雲三年(七六九)の道鏡事件の当時の記録と少し記載に齟齬^{そご}があります。大平先生は、これを比較していくことを考えておられるのだと思います。

さて、いよいよ閉会の時間となりました。本日は、いろいろ有意義な話をうかがって、桓武天皇に関する認識を新たにしました。

桓武天皇に関しては、新王朝の創始者というようなことがよく云われておりますが——わたくしも、冒頭で革命思想という言葉を用いました——この用語の使用には、慎重でなくてはならないことが、佐野先生のご報告でよくわかりました。ただ、桓武天皇ご自身には新王朝といった意識はなかったかも知れませんが、客観的にみて、この時代が大きな劃期であったという評価は動かないと思います。

なお、これに関連して、最後に一点補足しておきます。桓武天皇はいろいろな目新しい施策や事業を実行に移しますが、それ自体は、天智天皇以来、歴代天皇が律令国家の建設に向けて積み重ねた努力を否定するようなものではありませんでした。みかたによっては、桓武天皇は、律令制の再興を理想としていたと云えます。しかし、現実には厳しく、天皇お一人の力ではどうにもならないほど、律令国家は破綻寸前だったのです。桓武天皇朝の評価については、今後もさまざまな角度からの検討が^{もと}求められますと思いますが、「桓武天皇とその時代」というシンポジウムも、ぜひ第二部・第三部を開催し、さらに理解を深めていくことができれば幸いです。本日は、長時間どうもありがとうございます。

【佐野】以上をもちまして、平成二十七年皇學館大学研究開発推進センター神道研究所公開学術シンポジウム「桓武天皇とその時代」を終了させていただきます。本日は長時間にわたりまして御聴講いただき、誠にありがとうございました。

天保 元年(代)	二月十日	44	大伴旅人の参勤となる(『寛日本記』)
二年(代)	二月七日	45	旅人の参勤(『寛日本記』) 旅人の参勤(『寛日本記』) 旅人の参勤(『寛日本記』)
三年(代)	二月七日	46	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
四年(代)	二月七日	47	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
五年(代)	二月七日	48	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
六年(代)	二月七日	49	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
七年(代)	二月七日	50	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
八年(代)	二月七日	51	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
九年(代)	二月七日	52	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
十年(代)	二月七日	53	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
十一年(代)	二月七日	54	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
十二年(代)	二月七日	55	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
十三年(代)	二月七日	56	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
十四年(代)	二月七日	57	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
十五年(代)	二月七日	58	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
十六年(代)	二月七日	59	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
十七年(代)	二月七日	60	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
十八年(代)	二月七日	61	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
十九年(代)	二月七日	62	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
二十年(代)	二月七日	63	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
二十一年(代)	二月七日	64	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
二十二年(代)	二月七日	65	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
二十三年(代)	二月七日	66	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
二十四年(代)	二月七日	67	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
二十五年(代)	二月七日	68	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
二十六年(代)	二月七日	69	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
二十七年(代)	二月七日	70	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
二十八年(代)	二月七日	71	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
二十九年(代)	二月七日	72	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
三十年(代)	二月七日	73	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
三十一年(代)	二月七日	74	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
三十二年(代)	二月七日	75	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
三十三年(代)	二月七日	76	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
三十四年(代)	二月七日	77	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
三十五年(代)	二月七日	78	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
三十六年(代)	二月七日	79	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
三十七年(代)	二月七日	80	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
三十八年(代)	二月七日	81	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
三十九年(代)	二月七日	82	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
四十年(代)	二月七日	83	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
四十一年(代)	二月七日	84	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
四十二年(代)	二月七日	85	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
四十三年(代)	二月七日	86	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
四十四年(代)	二月七日	87	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
四十五年(代)	二月七日	88	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
四十六年(代)	二月七日	89	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
四十七年(代)	二月七日	90	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
四十八年(代)	二月七日	91	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
四十九年(代)	二月七日	92	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
五十年(代)	二月七日	93	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
五十一年(代)	二月七日	94	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
五十二年(代)	二月七日	95	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
五十三年(代)	二月七日	96	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
五十四年(代)	二月七日	97	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
五十五年(代)	二月七日	98	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
五十六年(代)	二月七日	99	光仁天皇の御病(『寛日本記』)
五十七年(代)	二月七日	100	光仁天皇の御病(『寛日本記』)

[illegible]



續日本紀史料とは？



(續日本紀史料全二〇巻二冊／原編校刻会、平成22年8月11日)

2 『續日本紀史料』第一章 史文甲・貞・昭和62年

もともと私共が史料編纂室を構想したのは、東大の史料編纂所が、前述の
とく六国史以降の正史編纂を目的とするのに対し、六国史時代のものについ
ても『大日本史観』と同様の形の、編年史料集の必要性を痛感してゐたからで
ある。
……現在の古代・上代史学界の水準からすると、六国史の記事のみで研究す
ることは不十分で、それを補う関係諸史料を集成し、これを総年に整理編纂す
ることが強く要望されてゐる。そのため、これまでにも、研究者個人によつて
類似的試みがなされてきたが、それらは、或いは中断せられ、或いは部分的
個別的であつた。このことは、本編纂事業が単独で行ふことの困難であること
を物語るにゐるばかりではなく、協同研究として、それに要する陣容・時間・
経費等において容易ならざることを示してゐる。そこで、私共はこれを本学
たのである。

前半：延暦二年二月己（三）上巻
後半一〇 文武天皇元年（六九七）から天平字二年（七五八）七月まで
後半二〇 卷 天平字二年（七五八）八月から延暦一〇年（七九一）まで

画像省略

（四位下・行形部大輔兼左兵衛督太子・孝子臣・菅野朝臣眞道等奉勅撰）

画像省略

後半：延暦二年八月癸丑（三）上巻
後半二一 四〇 天平字二年（七五八）八月から延暦一〇年（七九一）まで

画像省略

「大正臣御二位兼行皇太子仲卿大弐臣藤原朝臣繼體等奉勅撰」
「大正臣正二位兼行皇太子仲卿大弐臣藤原朝臣繼體等奉勂撰」（卷第三十六）
（図版は『続日本紀』達左文庫本）

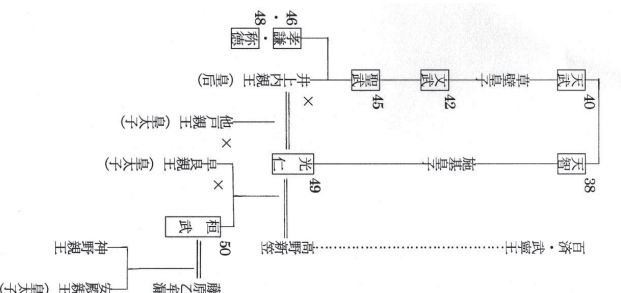
5

■開運略年表	
宝龜四年（七三三）正月庚寅（二日）	山部麁王立太子（3）
天応元年（七八一）四月辛卯（三日）	山部麁王即位、桓武天皇（45）
延暦四年（七八五）九月乙卯（三日）	藤原種継の暗殺事件
延暦一〇年（七九一）七月甲申（三日）	征夷使を任命、大伴大膳麻呂
延暦二年（七九三）正月丙子（二五）	藤原小膳麻呂、紀古佐真を派遣、相地
同年（七九三）正月乙亥朔	「東院」に遷御、宮を遷すため。
延暦三年（七九三）正月乙亥朔	大伴弟麻呂に断刀を賜ふ
同年（七九三）八月癸丑（二三日）	続日本紀後半の上巻
同年（七九三）一〇月丁卯（二八）	大伴弟麻呂が異報告／平安遷都の詔
延暦一六年（七四七）二月己（三）	続日本紀前半の上巻
延暦二五年（八〇二）三月辛巳（二七日）	桓武天皇崩御（70）

『続日本紀』の成り立ちは複雑で、延暦十三年・同一六年などの上巻が残る。

三、なぜ当代を筆にまよるのか

■桓武天皇と皇位継承



- 4 『續日本紀』延暦八年明年（六九〇）正月壬子（二五）
壬子、大枝山陵に葬る。皇太后、姓は和氏、諱は新皇、贈正一位、繼の女なり。
母は贈正一位、大枝朝臣某妹なり。父の先は自済武皇王の子、純陀太子より出ず。
皇后、宮城坂宮にて、風に漁客を著す。天皇高祖天皇遷葬の日、増きて納れ
たまふ。今上「桓武天皇」、平良親王、能登内親王を生めり。……
- 5 『續日本紀』宝龜三年（七五二）三月癸未（二日）・五月未（二五）
三月癸未、皇后井上内親王、五歳に坐して薨せらる。……丁未、皇太子他戸王を
廢して庶人と為す。
- 6 『續日本紀』宝龜六年（七五五）四月己丑（二七日）
己丑、井上内親王、他戸王並ひに卒す。
- 7 『日本紀略』延暦四年（七八六）九月乙卯（二三日）・庚申（二八日）
乙卯、中納言正三位兼式部卿藤原朝臣種継、賊に襲われ射らる。兩箭身を貫き
……庚申、詔して曰わく云々。中納言大伴家持、右兵衛督立直枝王、春宮亮紀白
式部卿藤原朝臣を殺し、朝庭を傾け奉り、早良王を害せむと謀けり。

- 1 -

— 70 —